
私の敵は変質者？

水姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の敵は変質者？

【Nコード】

N5004P

【作者名】

水姫

【あらすじ】

主人公の明は男勝りな女の子。

それに対して大親友の梨華は女の子らしくて可愛い、天然な女の子。そんな梨華を小さい頃からずっと守ってきた明。

今度の敵は超変態！敵は梨華ではなく明に目を付けて・・・！？

プロローグ

（プロローグ）

私は君を守るって決めた。

絶対に守るって。

君と初めて会ったとき。

私とは正反対で、可愛い。守りたい。

そう思った。

君は優しいから、危ない事をするなって言うけど

私は大丈夫って言うけど、私が決めた事だから。

私は命に掛けても君を守るって決めたんだ。

たとえどんな相手でも、私は君を傷つける人は許さない。

私は喧嘩は強い。自慢できる事じゃないけど。

可愛くて綺麗で、優しく、ちょっと天然な君はすぐに目を付けられる。

何度も何度も色んな奴から守ってきた。

守ってきた、ってのはちょっと違うかもしれないけど。

『君を傷つける奴は許さない』

どんな相手でも。その言葉に例外はない。

そう、相手が、最悪の馬鹿女でもだ！

第一ラウンド「最悪の出会い」

幼なじみ。

ずっと守ってきた幼なじみ。

大切に、大切な、幼なじみ。

「遅いなー？」

待ち合わせの時間、十分も過ぎてる……。
どうしたんだろう。

「ごめん。待ったよね><」

透き通った綺麗な声で言ったのは梨華。

「いや、大丈夫だけどな。でも……」

そう言う私に少し不思議な顔で問いかける梨華

「でも……？」

少し顔を赤くしながら、私は梨華にこういった

「何かあったのかって心配するだろ。梨華は可愛いんだから。」

「明！大好きー！！！」

そういつて梨華は私に抱きついてくる。

「もーう梨華！！離せって！学校遅刻すんぞ！」

「いーやーやーだー！！！」

「嫌だじゃない！早く行くよ！」

いつもならこの後

「ふああああい！」

と言うあくび混じりの返事が返ってくるはずなのだが。
私の耳に入ってきた声は、明らかに梨華では無かった。

「はあい！分かったわ！早く行きましょう！三人で！」

それは、梨華とは別の、元気で明るい声だった。

私が振り返ると、「キヤー！ー！かわゆい！」

と、謎の女が叫んだ。

私と梨華は顔を見合わせ、「知り合い？」とお互い聞き、首を振った。

私はまた梨華に悪いファンでも出来たのかと思い。

「誰？何か用か？」と威嚇いかくするような声で言った。すると女は、

「そうよ！二人に…と言うよりはあなたにね！」

私に指を指してきた。

「あなたはね！自分では気づかないでしょうけど…」

私は梨華に用だと思っていた。

私に用なんて、どういう事だろう。

「さっしこうに！最高に萌えるのよ—————！！！！！！」

………はあああああああ！?!?!?!?!

第二ラウンド「萌える理由」

……。誰も喋らない。

女は反応が無いため少しへこんでる。

「あのお…どういう事？」

沈黙に耐え切れなくなった梨華が口を開く。

すると女は急に明るくなり

「よくぞ聞いてくれたわ！」

急に大声を出し、梨華にとびつく。

「ひい！」

梨華が怯えている。

「お前何してんだ。」

何だよコイツ。

「そう！それよ！！！やってやったわナイスミー！」

「あなたはね！その強気な感じが萌えるの！！！」

「親友を守るその姿こそがいいのよ！」

「あなたって美人だしーかつこいいしーおまけに強いと来れば、マ

ジで最強バンババーン！！！」

急に喋りだしたよ、梨華固まってるし。

「…何ていうか、その…黙れ。」

「ガガガガガビョーバーン！！！！！」

「どんだけ古いんだよりアクション。」

「てか、意味わかんねーよ。」

私は訳が分からなかった。

「そうね！じゃあまずアレとコレから話します！！！」

「どれとどれだよ。」

「えっとー、まあようするにー」

「あ、ツッコミスルーか。」

少しの沈黙の後、女はこういった。

「私、美並みなみ 薫かおる！17歳！」

「まあ、率直に言うのと頼みがあるの！」

急に来て頼み事とか、本当意味わかんねー女だな。

「私と…親友になつて欲しいの！！」

「ああ、無理。」

女は照れながら言ったが、返事なんて決まってる。

「ええ！！何で！？」

「いいつて言うと思つてたのか。」

「当たり前よ！むしろ簡単にクリアして次は恋人になろうと！！」

「出来るわけないだろ。うぬぼれガール」

女はへこんでるみたいだ。

「へこんだり照れたり忙しい奴。」

「梨華さんも何か言つてやって！！」

女は梨華に助けを求め。

梨華がそんな事に答えられるわけ…

「明の親友は私なのー！！！！」プンスカ

「これからは私よ！！！！！！」マケルカー！！！！

ああ、どうしよう。謎の女のせいで梨華が狂った。

いや、最初から天然だからか。

とにかくどうにかしないと、この状況！！

あ、そっぴや完全に遅刻だ。あーどうなるんだこの後。

第三ラウンド「友達なら」

あれから10分。

梨華は女とまだ睨み合っている。

行く人達はジロジロと見ている。

ああ、もう嫌だ。学校行くぞ梨華。

「あのさ」

私が喋ると二人がいつせいにこちらを向く。

「悪いけど、私は親友になんてなる気ねーから。」

私がハツキリ言つと梨華は勝ち誇った顔をし、

女は悲しそうな顔になった。

「ほらね！明もこう言ってるし！」

梨華は満面の笑みを浮かべた。

「何で　　！？」

「私、あんたの事知らねーし。」

「じゃあこれから教えるわ！！」

「どんだけ必死なんだよ…。」

「だから！少しの間だけ一緒に行動しましょ！！」

「ダメだよそんなの〜！！」

女と梨華がまた喧嘩している。

「あゝもう！うるせー！分かったから！」

「本当！？」

「え〜〜〜」

「おう、だから早く学校行くぞ！」

「「はい」「二人が同時に言う。」

トコトコ

トコトコ

はあ…静かになった…ん？何か忘れて……？

「もう嫌だこのパターン。」

「だって梨華さんが!!」

「だってこの人が!!」

「ウワァー……!! トリャー……!!」

「あーもう喧嘩するな! 怒るぞ!」

私が怒鳴ると、梨華はしぶしぶ黙る。

「でも梨華さんが……!!」

「私の友達なら、まず梨華に変な事すんな!」

「え!? 友達? やったーイエーイ! パラダイス!」

「いちいちリアクションうざっ。」

「私! 美並薫はもう変な事はしません!」

「しょうがないな」 梨華が言っている。

「はいはい。じゃあ友達な。よろしく薫。」

「わ!! 名前! マジスかラッキースケッチブック!」

「何だそれ。」

その時、私たちは忘れていた。

待ち合わせ場所から、まったく進んでいない事を。

第四ラウンド「面倒な奴ら」

「とというか、学校行きましようよ!?!」
いや、さっきから言ってるんだろ

「あ!?!」
忘れてたのかよ。

「明嬢が忘れてるから」

「そっだよ! 明! 忘れちゃメツ! だよ」

「ああ、スゲエ殴りたいわお前ら」
てかマジで学校いかね」と!

私が全力疾走する。

「やばっ! 一時間目終わってる!」
私は時計を見た。まあ見なければ良かったと後悔したが。

「マジでやばい! 早く行くぞ!?!」

返事は返ってこない。
嫌な予感がする。

振り返ろうか? このまま走ろうか?
よし、振り返ろう。

かなり後ろの方で、二人が歩きながら喋っている。

「ああ! 走る明嬢もかっこいいわ」

「私の方が明のこと知ってるもん!」

「私もずっと観察してたわ!?!」
私は急いで引き返す。

どうしても二人に言いたい事がある。
どうしてもどうしても。

「おい」

二人はキョトンとした顔でこちらを見る。

「……………」

「何か言え。」

「お寿司食べたい」

「しらねーよ!」

そうこうしているうちに、やっと学校についた。

…うわ、もう2時間目だし。

私ら2時間も何やってたんだよ。

この後、彼女たちは遅刻の言い訳を相談するのであった。

第五ラウンド「明の怒り」(前書き)

男子vs明です

第五ラウンド「明の怒り」

「明く足が痛いよ」

「当たり前だろ立つてんだから」

あれから私たちは、2時間の遅刻のため（言い訳が出来なかった）廊下に立たされていた。

「はあくどうしてこうなったのかしら??」

「いや、半分ぐらいはお前のせいだよ薫」

はあ…何か疲れたな。

まあ当たり前か。朝、急に薫と出会って梨華との喧嘩を止めたりして

二人にツッコんで、全力疾走して

…そのうえ廊下に立ってんだもんな。

その半分は薫が原因なんだけど。

「私って何かしたの!? ねえ明嬢! 梨華さん!」

…本当に分かってないみたいだな。バカ?

「明の言う通りだよ! 半分は薫さんのせいだよ!」

「半分はあなたのせいでもあるわよ! 梨華さん!」

「薫にしてはまともな事言うな。」

…梨華悪い。

今日梨華の事、マジで馬鹿だと思ったよ。

「私は何もしてないもん!」

「私だって何もしてないわ!」って事は…」

「「明（嬢）のせい??」

「何でだよ。もうお前らヤダ。マジでヤダ。」

元はと言えば薫さんが!! 梨華さんだって!!

「お前らうるせえんだよ」

そうそう…って、ん？誰だ？

「誰よアナタ！イケメンね！明嬢には負けるけど！残念！」

「誰がイケメンだ、誰が明嬢だコラ」

「美並薫。テメエうるさいんだよ。黙れ」

…誰だコイツ

「あ！同じクラスの和宮瑠夏君だよね！」

何か聞いた事あるな。梨華知ってたのか。

「倉本梨華。お前もうるせえ、黒木にばっか頼ってるし」

あ？コイツ今なんだった。

「じゃあな。遅刻組」

スタスタ

「ちよつと待てー！ー！！」ドガツ！！

「つてえ！何すんだよ！」

「お前、今なんだった？」

「あ…明が怒っちゃった…」

「何！？何が始まるの！？」

「お前、さっき何て言ったって聞いてんだ。」

「は？うるせえって言ったただけだろ？」

「お前が梨華を悪く言うなんて5年早いんだよ」

「意外と早え…」

「もういい。最後に一つ言うけど、次に梨華の悪口言うときは…」

「その命、掛けてもらうからな。」

その時、梨華と薫は思っていた

もう、絶対に明を怒らせないようにしよう。

足が震えて動けません。

第六ラウンド「生徒会」

キーンコーンカーンコーン

「はあ〜やっつと終わっつた〜！」

梨華が言う。

「梨華はずつと寝てたたる。」

「まあね〜で、今日はどうする〜？」

「疲れたし、ちよつと寄るよ。」

二人の会話を聞いている薫は、話が分からなくてイライラしているようだ

「はい！バーン！何の話かしら〜？」

「ん？生徒会だよ〜薫さんは知らないかな〜？」

「生徒会？」

「私ら、仲いいんだよ〜生徒会と！」

梨華が自慢げに言う。

「いっつも、明が疲れたときとかに生徒会室行くんだ〜」

「何それ、何で？ミステリー！？ここは名探偵薫様の出番！！」

ワーワー　ハハハハ

「行くぞ。早く疲れ落として癒されたい。」

早くあの5人に会いたい。生徒会メイドの人にも会いたい。

「そんなにいい所なの？生徒会」

「う〜ん。良い人達だけど、そうでもないような・・・」

何を言っているんだ梨華。

あの人達超癒されるだろ。

「あ！そういえば薫さん、同じクラスだったんだね！全然知らなかった！」

「だって私、クラス替えして一週間、休んだもの」

「え？何で〜？」

「良くぞ聞いてくれたわ！あのね〜！私は明嬢の色々な研究を」

「ごめんなさいもういいです。聞きません。聞きたくありません。明を汚さないで下さい」
はあ〜疲れたな。

それにしてもこの二人、元気な事だ。
「早く行くぞ！！」

生徒会室 ガラツ

「どうも〜」

「失礼します」

「おじゃまします！ミステリアス生徒会！！」

「あ、来てくれたん？明！梨華！知らん子！」

「はい！来ましたよ〜」

「来たぞ〜。恵梨。」

「私は明嬢の恋人にな」ゲシツ

「こっちは友達の薫って言うんだ。」

「へ〜そうなんや〜」

「・・・はあ〜癒される〜」

「ここの生徒会は全員、大阪から来たんだぜ薫」

「あら。そうなんですか！どつりで関西弁！よろしくお願いします
^^
」

「うん。アタシは会長の恵梨。主に生徒会の仕事は全部アタシがや
つてる。ここの生徒会はサボリ魔やから。」

「なんつでやねん！お前ほとんど何もしてへんやろ！」

あ、副会長のツッコミ。

「薫。こっちが副会長の優。毎日毎日ツッコんでる人。」

「よろしくお願いします。優さん。」

「ウチは優でいいから。」

「本当は会長じゃなくて副会長が皆をまとめてるんだぜ。」

「会長……」

「ギャーギャー!!! ワーワー!!!」

「大体お前が!」 「お前が悪いねん!」

「ギャーギャー ワーワー」

「あつちで喧嘩してるのが会計の桃と庶務の愛。よくつまらない喧嘩してる人達。」

「私は愛や!よろしく!」 「桃は桃っていう!よろしく……いつた!愛!こら!」

「何をそんなに喧嘩する事あんねん!メイドっていう発音とかどうでもええわ!」

「優はよくツツコむな。私は梨華と薫だけでも疲れる。」

「で、あつちが書記の杏と、メイド(お助け)の美由」

「パツパラパー!」 「お前アホか。」

「杏!お前いい加減美由、笑わすの諦める!見てるこっちが可哀想なるわ!」

「毎日こんな風楽しくやってるからよろしくな!」

「あ、!優!それアタシのセリフやる!」

「ワーワーワー!!!」

「じゃあ行くわ、じゃーな」 「おじやましたね」 「失礼しま

すね……」

ガラッ

「どう、薫。癒されたら?」

「Z、E、N、Z、E、N、つなげると、全然。まったくもって癒されませんでした。」

「え?」

第七ラウンド「雰囲気」(前書き)

あと2、3話ぐらいで

明・梨華・薫の過去編始めます。

第七ラウンド「雰囲気」

はあく。昨日結局、何だかんだ言って、梨華の家に薫も連れて行ってしまったな。

梨華。怒ってたけど……。何だかんだであいつら仲いいんじゃないか？

「また遅れてる……。」「

また梨華、待ち合わせの時間に遅れてる。

まあいいけど……。

「おまたせ〜！」

あ、後ろから声が聞こえる。

何か違う声な感じだけど……

フイツ

振り返ると、すごく満面の笑みの薫がいた。

「お前か。」

「待たせたわね！マドンナの登場よ！」

「誰も待ってねーよ。」

はあ……。薫かよ。

あ、そっか友達になっただよな。

「あのさ……。明嬢。」

……。ん？昨日と雰囲気が違う……。

「私ね……。」「お待たせ！明……。あれ？薫さん！？」

「何よ！その不服そうな顔！私が居ちゃ駄目だって言うの梨華さん！」

「朝は私と明、二人で行きたいの！！」「いいじゃないの別に！」

「「ねえ！明（嬢）はどっちのことが好き！！！！？？？」」

「怖えよお前ら。てか本当は仲いいだろ。」

・・・薫、さつき何言いかけてた？
いつもと雰囲気、違ったような・・・？

「ねえ、明嬢！今度の土曜、一緒に買い物行かない!？」

「あ！ずるい！私も行くもん！」 「えー。私は何としてでも二人
がいいわ〜」

・・・気のせいかな。

「いいよ。3人で行こう。」

「明嬢が言うならいいわよ！百歩譲って三人で！」 「薫さんが邪
魔だよ〜」

「何ですって!？マジスカラッキー？」 「スケッチブック!！」

「何でお前ら連携プレー、マスターしてんだよ。」

・・・三人で買い物か。

まあビツクリはしたけど、悪い奴じゃないしな。薫。

「マスターランクの!？」 「ナイスミ〜!！」

「だからそれ何なんだよ。梨華も覚えてんのかよ。」

「当たり前前田の？」 「クラッカー!！」

「いい加減にしろ。」

ま、三人もいいかもな。

「私は美並薫。とてもすごいガールなんです。」

「私は倉本梨華。とてもすごいガールなんです。」

「二人あわせて！三ノ宮!！」

「お前らマジで何!？三ノ宮って何!？」

「チーム名よ！梨華さんと私の!！」

「うわ、マジでダセエ。」

ま、仲良くやっていけそうだな。

「とにかく、土曜のデートでは私と明嬢がラブラブに!！」

「そんな事私が許さないもんね!」 「梨華さんは明嬢のお父さん
みたいね!口うるさいし?」

「なんで薫が私のお父さん知ってるんだよ、怖えよ。」

ギヤース ギヤース ワーワー
.....多分。仲良く.....出来るよな？

第八ラウンド「買い物なのか？」

時刻は10:00 とても快晴な土曜日。

「はあ、また私が一番。」黒木明は考えていた。

何でいつも梨華は遅れるのだろうか。

薫も遅れてる……。

チヨット待て。私が早いのか？

私がこの日を一番楽しみに？いや、ないない！

「明、お待たせ！！！」

「おー梨華！」

うっ、梨華。花柄ワンピースに淡いピンクのカーディガン？タイツ？黄色いサンダル？

女の私から見ても超可愛い！こりゃー悪いファンもつくわな。

「薫さんはまだなんだ〜！あれだけはりきってたのに！」

ああ、薫。私が一番乗りよ〜とか言ってたのにな。

「もう薫さんと会って6日目だよ！！！」

「ああ、そうだな。」

「最初は超ビックリしたけどね！」

「まあ案外良い奴だけだな。」

「ええ〜そうかな？」

うん。よく考えると良い奴かも、じゃなくていい奴だよな。

何だかんだで梨華が先輩に目付けられたりしたら、カバーしてたし。

ま、梨華も梨華でちゃんと分かってんだろ。

「私が出来たわよ！喜んで！さあ！」

「あ、薫。」「薫さん、遅いよ〜」

「ボケをスルーしないでくれるかしら！！！」

「「ツッコむのメンどい。」」「何気にひどいわね！！！」

薫……だよな。うん。一瞬誰かと思った。

薫って結構落ち着いた服なんだな。

黒のタートルネックにデニムスカート……。黒いブーツ。

普段掛けてないのに、メガネまで掛ける……。

「薰さん！一瞬誰かと思ったよ！似合ってるね！」

「ふふん。当たり前よ。」

「確かに似合ってるな薰。」

「キヤアアアアアアアアア明嬢キヤアアアア！」

「私が褒めたときと反応違いすぎない!？」

薰って黙ってたら美人の原点だよな。

「で、今日は何買った？」

「そうだね〜何買ったの〜薰さん？」

「ん？今日はね〜買ったんじゃないの!？」

「「は?」「試着するだけよ!私の家の店でね!」

「薰って家、何か店やってんのか?」「ええ!」

「へ〜そうなんだ知らなかったよ!で、何を試着するの?」

「…なんか嫌な予感。薰の家の店って…」

「ん〜内緒よ!まあついてきて!」

「ついたわよ!〜ここよ!」

「ついてない。帰ろう。」 「そうだね!帰ろっか!」

スタスタ ガシッ

「逃がさないわよ!」 「ですよね〜」

え、ちよつと待って、私の目がおかしくなければ、ここって……

「「コスプレ喫茶!?!?」」

「そうよ!よく分かったわね!」 「ここに思いっきり書いてるだ
る。コスプレ喫茶って。」

「何で!?!何でここが薰さんの家!?!何で私たちを巻き込むの!?!」
梨華……すごいテンパってる。

「だって〜」 「だって!?!」

「明嬢、ついでに梨華さんのコスプレ見たいもの!!」

「そんな理由で連れて来るな帰れ馬鹿。」 「そうだよ!!」

「なら帰るわ!自分の家に!さあ三人で帰りましょう!!」

ガシッ ガシッ

「はぁ・・・ここに居ても時間の無駄か。とりあえず入ろう梨華。」

はぁ。どうなるのか。まあ死んでも着ないけど・・・。

やっぱコイツ信じるんじゃないかったー！！！！！！

第八ラウンド「買い物なのか？」（後書き）

次回へ続く・・・w

第九ラウンド「Feelings not conveyed」(前書き)

薫の過去です。

意味は、『伝えられなかった気持ち』

第九ラウンド「Feelings not conveyed」

「はぁ・・・」

今日は雨。少しジメジメした日曜日。

「今日で二人と出会って一週間か・・・」

部屋の窓を見ながら、美並薫は言う。

昨日の明嬢と梨華さん・・・可愛かったな・・・。

そう、昨日はあれから色々な説得をし、結局色んなコスプレをしてもらった。

「いつか私の気持ち・・・届くのかしら・・・」

薫はいつも冗談ばかりで明を好きな理由もごまかしているが実はちゃんとした理由があったのだ。

「薫、10歳」

「ふざけるな!!」

ガシャーン!

「あなた!やめて!」

薫の家は両親の仲が悪く

父はいつも暴力ばかりだった。

「うるせえ!薫!酒持って来い!」

「・・・もうないよお父さん。」

「ねえだあ!?関係ねえよ持って来い!」

バシッ!

薫は毎日のように虐待を受けていた。

・・・お父さんは本当は良い人なんだ。

薫はそれだけを信じ、耐えていた。

だが、薫12歳の頃。

「おい、俺はもうお前らには用無しだ!出て行くからな!」
父はこんな事を言った。

「待つてよお父さん！」

母は追いかける気も無く父を睨んでいた。

私が父を取り戻さないと！

そう思い外へ出たが・・・

「・・・お父さん・・・？」

父は見たこともない女の人と肩を組み、タクシーに乗った。

それから月日は流れ、母は女手一つで薫を育て、薫もそれに応えるような素直で優しい子になった。

その頃から薫は、男の人と付き合っても良いことは無く、父と母のようになると考え

いつしか女の子に興味を持つようになったのだ。

（薫15歳（高1））

「お前気持ち悪いんだよ！レズが！」

「ちよつと可愛いからって調子に乗ってんじゃねーよ！」

その時薫は、クラスの女子に呼び出されていた。

薫はGLガールズラブが好きで、見た目がいいため男にモテる。

それを妬んだギャルたちだ。

「別に・・・私はモテようと思ってないわ。」

薫は男には興味は無い。迷惑なほどだ。

「嘘ついてんじゃねー！」

誰も私の事なんて助けないな。

見てみぬ振りをする生徒たちを見て薫はそう思った。

「ふざけんのもいい加減にしろよ！」

そういつて女子が手を振り上げた

薫は思わず目をつぶる。

・・・痛くない？

そう思い目を開けた先には、綺麗な黒髪ショートのかっこいい女の子がいた。

「テメエらモテねえからって逆恨みしてんじゃねーよ。」
その女の子はハッキリとそういった。

「お前誰だよ！」 「あ、コイツ黒木明！凶暴だつて噂の・・・」
「そうそう、よく知ってるな性格ブスの軍団が。」
「なんだとテメエ！」

女子たちが襲い掛かる。危ない！薫は心の中でそう叫んだ。
パシッ。明と言う女の子は女子の手をつかみ、

「テメエら、ふざけんのも大概にしるよ？趣味なんて人の勝手だろ？」

と、低い声で言う。女子たちは悔しそうに逃げて言った。

薫は自分を守ってくれる人がいたと言う事にビックリした。

それに、この人は私の女の子好きを否定しなかった。

その時、薫の中に、ある言葉が浮き出た。

この人が好き

第九ラウンド「Feelings not conveyed」(後書き)

次回も引き続き薫の過去編です。

第十ラウンド「Impossible Love」(前書き)

引き続き薫の過去編です。

タイトルの意味は『かなわぬ恋』

第十ラウンド「Impossible Love」

「大丈夫だったか？名前は？」

目の前の女の子は言う。

「美並……。いや、名乗らなくていいです。」

なぜか分からないが名乗りたくないと思った。

また会ったとき、いじめられてた美並さん。とか思われたくないからかもしれない。

「ん？分かった。私は黒木明。1 Aだ。よろしく」

「はい！」

その日の帰り道。

今日の女の子……。明って子。かつこよかったな。

私、あの人の事、好きなのかしら

守ってくれたな……。

小さい頃から、自分がワガママを言ったりしたら、母が悲しむ。

そう思ってた我慢してきた。

どんな事があっても泣かずに、母を守ってきた。

それにこんな私を、守ってくれる、愛してくれる人なんていないと思ってた。

なのに……。あの子は、明は、私を迷いもせず助けに来た。

守りに……。こんな私を……。優しく包んでくれた。

「あら……。？どうして私、泣いてるのかしら……。」「ポロポロ

嬉しい……。はずなのに……。」「ポロポロ

その日私は、初めて我慢せずに泣いた。

泣いて、泣いて、止まらない涙を拭いて、また泣いて。

翌日

私が登校すると、昨日の女の子がいた。

「あ、明さ……」私は挨拶しようとしたが、隣に女の子がいるのを見てやめた。

「明く大好き」 「やめろって梨華。」

梨華……？友達なのかしら。

「あ、あの二人仲いいよね」 「うんうん。黒木って子と倉本って子でしょ？」

「あの二人幼なじみで、ずっと一緒なんだよね？」

「黒木って子は、幼なじみをずっと守ってきたとか噂になってるけど。」

「なんか羨ましいよね」

……倉本梨華。明さんの幼なじみ？

ずっと一緒だった……守ってきた……か。

ははは。何だ、私が特別とかじゃないわよね。自惚れてたのよね。

……自分だけが妄想に浸ってたって訳よね。馬鹿みたい。

それから私は、黒髪を明るい茶髪に染め、髪を今風にアレンジして、オシヤレも勉強し、変わろうと必死だった。

頑張った成果もあり、別人のようになった。

諦めようとも思った、でも、諦められなかった。

あの人だけは特別だった。それにあの子の特別になりたかった。

ずっと思ってた。誰かの一番になりたい。誰かに好きでいてもらいたい。

その、誰かは、もうあの子でしか考えられなかった。

2年生になってクラス替え。あの子と同じクラス。

神様にとっても感謝した。でも、梨華って子も一緒だった。

やはりあの二人は仲が良く、悲しかった。

でも、そんなのどうでもいい。私はあの子と、明さんと一緒にいた

いんだ。

はあ・・・やっぱり明嬢は梨華さんが大事なのよね。
でも、梨華さん。覚えていて。

いつか、絶対、必ず、明嬢を振り向かせて見せるわ。

それまでは、明嬢を頼んだわよ。

例えこの恋が叶わない恋でも、私は明嬢を・・・黒木明を愛し続けるわ。

第十一ラウンド「生徒会の日」(前書き)

今回は初の生徒会メイン回です。

過去編が終わったあとなので楽しくやりたいです。

第十一ラウンド「生徒会の日」

キーンコーンカーンコーン

放課後のチャイムがなる頃。

6人の変わった少女たちが動き出す

「はあくめんどくさいなあ。」

「まだ何もしてへんやる!」

面倒臭がりの会長、恵梨。皆をまとめる副会長、優

「じゃあ、今日の報告言つて。」会長が言つ。

「はいますずは私」

いつも明るいノリで元気な会計、桃

「えく桃?ちゃんとと言えるん?」

いつも桃にキツイ一言を言うしつかり庶務、愛

「言えるわ!」「そうかな?」

「お前ら喧嘩やめろ!」副会長はツツコミ係。

「まあまあ・・・大丈夫だと思う。」

いつもマイペースなホワホワ書記、杏

「二人ともうるさい。」

生徒会一の一言娘。クールなメイド(お助け)、美由

この六人は生徒会。

学校を管理する6人なのだが・・・。

「じゃあ報告!私が見回りしてたら一人の生徒が声掛けてきて」

「それで?」

「ガラス割ってんてくまあ謝ったから許した。で、ガラス変えても
らつたよー!」

「ああ、そうなん?まあ謝ったならええやん。」と副会長。

「殴りたいけどまあいつか。じゃあ次。」少し許せない会長

「いいよね・・・」優しい書記。「どうでもいい。」興味すらない
メイド。

だが一人だけ違う反応を見せた。

「ちよつと待て・・・今日、先生が言つてたぞ。会計がガラス割つたつて・・・お前の事だる桃！」

会計の失敗は許せない、そう思う庶務の愛。

ジロツ 皆がいつせいに桃を見る

「えゝ？あは・・・あはは！」桃は笑いを作る。

ジーーー 皆はじつと桃を見ている。

「あはは・・・。。。。。」ジーーーーー 「割りました・・・。」

「よし素直。いいよ桃。」 「はいじゃあ次、愛。報告」

桃が認めたとたん皆は会議に戻る

「えつと、生徒会に来たら、ドアが壊れてた。」

「。。。え？？」 「美由と愛以外の皆が言う。

「だから変えてもらつた。終わり。」

「誰やねんそれ！生徒会に恨みでもあるんか？」 「抹殺するぞそいつ。」

「ちよつとヒドイね・・・。」 「私より悪質だね！」

「ああそれ私。」 美由が軽く言う。

「。。。は！？」「。。。美由以外の皆が叫ぶ

「いや、なかなか開かなかつたから蹴つた。」

「蹴つた。じゃねーよ！蹴るなよ！てか何でそんな冷静！？」副会長
長のツツコミが大きくなる。

「美由・・・何やってんねん。」これには会長もビツクリしたよう
だ。

「美由・・・駄目だよ。」書記が言う。 「私と仲間だゝ！！」会
計が嬉しそうだ。

「あゝ美由・・・」愛が残念そうに言う。

「まあいいや、次、」 「いいのかよ」

「あ・・・今日私は報告ないよ。」書記は言う。 「私もない。」
美由も言う。

「アタシはもちろん無いよ。」会長が自慢げに言う。

「何をそんなに自慢げやねん。じゃあウチな。」

「えっと、花壇が踏まれてた。足跡調べたら2〜3人の足跡やったけど。」

「ああ。それアタシと生徒Aと生徒B。」会長が言う。

「いや、生徒Aと生徒Bがいじめやってたから殴った。で、押し合いになって花壇踏んだ。」

「いや、いい事したとは思うよ!?でもなあ・・・。」

「うん。優。言いたい事は分かるよ。」

「さつきから聞いてたら、問題起こしてんの生徒会ばかりやないか!！」

「いいじゃん仲間だよ。」会計が軽く言う。

「そんな仲間いらんねん!」

・・・こんな生徒会で大丈夫なのだろうか。

だがこの生徒会、行動力と根性だけはあるようだった・・・。

生徒会の日 END

第十二ラウンド「質問OK?」(後書き)

次、梨華の過去編に行こうと思います。

第十三ラウンド「ありのままの私」

「はぁ……」

自分の部屋で大きなため息をついているのは、倉本梨華。

他人から見ると一見悩みがなさそうに見える彼女も、深く悩んでいた。

「私、このままでいいんだよねえ……明。」

梨華、14歳

「明、彩、おっはよ!!」

元気に挨拶をする梨華。

黒木明と倉本梨華は小さい頃からの幼なじみで、とても仲が良かった。

そしてもう一人……

「おっはよー梨華」

この少女は長島彩。ながしまあや

中学に入って、二人と仲良くなった少女だ。

とても明るく、優しく、大好きな親友だった。

キーンコーンカーンコーン

「帰るぞ、梨華。彩。」

「あ、ごめん！今日、私遊ぶ約束してんだ！二人で帰ってて！」

「分かった。じゃあな彩。」

「ばいばい！彩！あ、明！ちょっと待って忘れ物！」

彩は遊ぶ約束してるのか。

ふむふむ。良いことだ。

私も三人で色んな所行きたいな。

これからいっぱい行けるよね！

明と彩と・・・三人で！

二人とも大好きだよ。

「あ、明じゃあ帰ろう！」

スタスタスタスタ

「マジで〜？ギャハハハハ」

「あれ？何か声聞こえるよ〜」

「ここ、普段使ってない階段だぞ？」

「ちよつと行つて見ようよ明！」 「うん。分かった。」

トントン トントン

「マジでウザイよ〜アイツ！」

あ、彩の声だ〜！まだ学校に居たんだね！

「私はさ、明と仲良くなりたかつたんだよ？で、明が、大好きな幼なじみがいるって聞いたから

仲良くなつて見たら、天然オトボケキャラ！マジウゼエWWW」

ん・・・それって私の事？

「彩！？アイツ何言つて・・・！」

「待つて明。」

「梨華つてさ〜私の事大好き〜とか言ってるけど、本当だと思う？」

あれって絶対演じてるよね！」

・・・本当だよ？本当に大好きだよ彩。

三人で色んな所行つて、いっぱい喋つて、

本当に大好きだったんだよ。

「・・・彩。」 「は？誰・・・梨華。」

「私の事、ずっとそんな風に思つてたの？大好きだったのに。」

「彩、お前ふざげんなよ！」 「ごめん明。私に話させて。」

「彩、私の事嫌いだったの？仲良くしてたのに・・・。」

「仲良く？馬鹿じゃね？お前、絶対キヤラ演じてるだろ？」

「演じてなんか無いよ！本当に彩の事、好きだったんだよ！？」

「は？そういうのマジでキモイ。てか、演じてないならもっとウザイ。素でそれかよ」

「嘘だよね！？ねえ！嘘だよね彩！！」

「泣けばいいと思ってんの？あーウザッ。私、お前の事友達だっと思ってた事ないし。」

「てか、お前に優しくしたら、明に好かれるかな」と思っただけだし。」

「ヒドイよ・・・私は彩の事大好きだった！！」

バタバタ バタバタ

「梨華！！・・・彩。」 「・・・何だよ。」

「許さねえから。」 「ギロツ」 「・・・っ。」 「ビクッ

バタバタバタバタ 「梨華~~~~！！」

後ろで明が呼んでる・・・。

ごめん明。私今、無理だよ。

彩・・・好きだったのに・・・。

私ってそんなにうつとうしい性格なのかな・・・？

そりゃ・・・約束とか時々忘れるし・・・一人じゃ何も出来ないし・・・。

嫌われて当然か・・・。

・・・あれ？もしかして・・・明も？

明も私の事嫌いなもの？

私って、嫌われ者だなあ・・・。

第十四ラウンド「明も彩と同じ」

「梨華！！」

ガシッ

「やめて！離してよ！明も私の事嫌いなんですよ！！」

「・・・は？誰が言ったんだ？」

「私が思ったの！明も彩と同じで、私の事迷惑なんですよ！？」

「んな訳ねーだろ。」

「嘘だよ！もういいよ！！」

・・・何やってるんだろう。

明は何もしてないのに。

自分のせいで嫌われたのに、明は関係ないのに。

私が悪いのに、明は悪くないのに・・・。

「何だよそれ・・・何で決め付けんだよ。」

「・・・ごめん。」

「いや、いいけどさ、彩の事は・・・気にすんな。」

「・・・」 「って言っても無理か。」

「・・・まあ、いっぱい悩め。でも、忘れんなよ？」

「私は、梨華の事、ありのままの梨華の事、大好きだぞ。」

ありのままの私・・・。

ありのままの私が・・・好き・・・？

「そりゃー馬鹿で天然かもしれないけど、私はそのまんまの梨華が好きだ。」

「明・・・明！」 「おーおー泣くなつて。」

「明が言う、ありのままの私でいいんだよね？」

あれから彩とは喋らなくなっただけ、いいんだ。

明は変わらず傍に居てくれてるから。

どんなに裏切られても、傷ついても、

いっつも隣に明がいるから平気。

明はいっつも損得考えずに動いて・・・。

単純で男勝りで危ない事ばっかするけど、

私もそんな明が大好き。

これから先もずっと。

第十五ラウンド「梨華と明」(前書き)

過去編のおまけみたいな物ですね！
今回も梨華目線です！

第十五ラウンド「梨華と明」

「あれ？薫さん来ないね〜」

「おお・・・来ないな。」

いつもの待ち合わせ場所・・・。

薫さんが・・・来ない！！

ピリリリリ　ピリリリリ

「あ、メールだ。薫から。今日、風邪引いたので行けません（笑）
だって・・・。」

「え！？薫さん風邪？うわ〜大変だ！」

「馬鹿は風邪引かないって言うのにな。」

「私は風邪引くよ！って事は馬鹿じゃないって事だね！」　フンス！

「うわ・・・私風邪あんまひかねーよ・・・。」

「うわー馬鹿だ！みなさーんここに馬鹿がいますよ〜」

「殴るぞ梨華。」　「おやめになっ〜」　「黙れ。」

久しぶりに明と二人・・・。

薫さんには悪いけど楽しいな〜。

「てか、薫は何で風邪なのに（笑）とか上機嫌なんだよ。」

「馬鹿だからじゃない？」　「梨華、マジで薫に厳しいな。」

「だって部下だもん！上司は部下に厳しいでしょ！？悪い人でしょ！？」

「お前の中での上司のイメージは何なんだよ。てか薫は部下？」

「はっはっはー！やっとなつづいたのかね課長！」

「誰が課長だ！お前誰だよ。」

「うーんとね・・・黒木明ファンクラブ社長の倉本梨華です！」

「今日限りでファンクラブ会社は倒産しました。」

「してないよ！無敵だよ！」

「何だよ。てかそれなら何で私まで社員なんだよ。」 「あ……
そっか。まあいいや。」

「いいのかよ。」

やっぱり楽しいな。明と居ると。

薫さんも楽しいけどね！やっぱり三人でもいいかな？

「待たれよお主ら。」

あれ……この声は……！

「薫！？」 「薫さん！？」

「ふふふふ……風邪なんてひかないわ！作戦成功よ！」

「何それ？」 「作戦って何だよ。」

「略して『明嬢と梨華さん！今二人きりにしたら二人はイチャイチャするの確かめよう作戦』よ！」

「長えなおい。てかそれで略してんのか？どんだけ長えんだよ。」

「薫さん、それってはっきり言っと覗き見だよね？趣味悪いよ！」

「趣味悪い！？それを言うなら梨華さんよ！私が居ないからって明さんとイチャイチャして！」

「何を言うか部下よ！」 「うるさいわよ馬鹿社長！」

ギャーギャー ワーワー

「あーやっぱりこいつら馬鹿だった。」

……やっぱり三人一緒の方が楽しいな。

だから……今はこれでいいや！

第十六ラウンド「帰り道に気をつける」(前書き)

今回はセリフが多いです。
ナンパにあってる話なので。

第十六ラウンド「帰り道に気をつける」

「いや〜今日も楽しかったわね。」 「そうだね薫さん!」

「誰かさんにツッコむの疲れたけどな。」

「え?誰?」 「お前らだよ馬鹿。」

「てか、自覚あるのか?」

「あります!」

「あるのかよ、なお悪いわ。」

「そこの三人〜待ってよ〜」

「「え?」」

「うひよ〜美人〜。俺あの黒髪の子タイプだわ〜ショートの子!」

(明の事)

「俺はあの茶髪の子!」 (薫の事)

「俺は圧倒的にあのロングの子!」 (梨華の事)

「何ですか?早く帰りたいんですけど。」

「まあ〜ナンパかな?」

「そこはつきり言うのかよ!〜ってヤバ。ツッコんじゃ駄目だろ。」

「え?え?何?ツッコミ系の女?気強いな〜ドストライクだわ〜」

「さっさと帰って寝る馬鹿。」

「うわ〜俺悪いけど、気強い女すんげえ好みなんだよな〜」

「本当に悪いな。梨華、薫。さっさと行くぞ。」

「ええ・・・こんな腐れナンパチャラ男達に興味は無いわ。」

「私も!こんな変態タラシ馬鹿男に興味ないよ!」

「何でお前らそんな毒舌になってんだよ。」

「それって俺らの事〜?ヒデエ〜」

「全員気強いんだな〜ヒュ〜テンション上がるぜ」
「それにしても可愛いな〜。」

「黙れよ。てか目障りなんだよ消えろ。」

「ほら〜早く帰らないと明嬢が怒るわよ〜」

「鬼みたいになるよ〜！」 「誰が鬼だコラ。」

「ちょっと調子に乗りすぎじゃね？」

「ああ、ナメられちゃってんな。」

「やつちやわね？」

「うわ、コイツら女相手に三人でかかってくるつもりだよ。」

「大人げないや男気ないわね！」

「明！やつちやえ〜」 「結局私かよ。でもな〜コイツら何もしてね〜しな？」

「どうしようかな・・・。」

「人見てるしな〜。ナンパされて殴るってのは率直すぎねえか？
でも何か腹立つんだよな、チャラ男って。」

「行くぞ！オメーら女おさえろ！」

「・・・チツ。やっぱ口クでもねえ奴らだったか。」

「触らないでくれる！？汚いのよ！」

「痛いよ！離してってー！」

「・・・ってもうつかまってる！？こっしちやいらねえ！！」

「お前ら消えろよ。私らは家に帰んだよ！」

「サツ ゲキツ！」

「いてててて！手首折れる！折れるって！」 「いてえ！手首手首
！」

「てかお前何者だよ！三人同時に手首ねじるとかどんだけ怪力だよ

「！」

「うっせえんだよ消える。」

ゴツン 「うわっ！頭ぶつけた・・・！」 「あの女壁にぶつけやがったな！」

「・・・ただじゃすまさねえ。確か・・・明？とか言ったな・・・あの女」

「かつこいいよ明！」 「さすが私のマイダーリン！」

「何でだよ黙れよ疲れた。さっさと帰るぞ。」

キャハハハ ワーワー

「あの女、ぶつつぶしてやる。」

第十七ラウンド「三人のピンチ」(前書き)

今回は梨華と薫が二人っきりです。

第十七ラウンド「三人のピンチ」

「ねえ・・・さつきから何か誰かに見られてるっぽい・・・。」

「え！？そうかしら？私は分からないわよ？」

スタスタ トコトコ

「やっぱり見られてるよ・・・明が居ればなあ」

「明嬢は帰ったわよ！我慢するしかないわ。」

今、二人の後をつけているのは、

昨日三人をナンパした、チャラ男達だった。

明は帰り道が途中から違うので、先に帰った。

という事は、薫と梨華。二人きりで帰っているという事になる。

チャラ男達は明に軽く倒された事をうらみ、

二人を人質に取り、明に仕返しをしようとしているのである。

「やっぱりつけられてるよ・・・何とかしてよ薫さん。」

「私！？無理よ。もうちょっとで家よ！大丈夫！」

普段はどちらかがボケたりするのだが

今はそれどころではないようだ。

「あの二人、何か言い争ってるぜ？」

「ほっとけ、そろそろ行くか。」

「そうだな。早く捕まえようぜ」

ソロリ ソロリ 背後から近づくと男達

「待ってくれねえかい？かわいいこちゃん」

二人が振り向いた瞬間、男達は二人の口を塞ぎながらこういった。

「ちよっとついてきてもらっせ。」

「俺たちのボスが待ってたんだ。」

「あの女に仕返ししないと気がすまねえ。」

「んー！」 @ ー！ー！」

梨華は必死に助けを呼ぼうとするが、声にならない。

薫は何を言っているか分からない状態だった。

「さーて、お楽しみはこれからだぜ。」

ピリリリリリ。ピリリリリ

「あ？電話？誰だよ。」

・・・非通知？誰だ。何か嫌な予感がする。

「もしもし？誰だよ。」 「明ちや〜ん？覚えてる〜？」

「お前、昨日のクソ男か？」 「失礼だな〜（怒）」

「なんで電話番号知ってたんだよ。」

「お友達の女の子から聞いたよ〜」 「お前、聞いたっていつか、

携帯見たんだろw」

男達の声が響く。

「は？もしかして梨華と薫か？」 「そうそう！勘がいい子も好き

だよ〜」

「誰でも分かるよ。死ぬ」 「そんな事言っつて、お友達どうなつてもいいの？ほら、何か喋って」

「明〜！梨華だよ〜！捕まっちゃった！」 「薫よ！明嬢！これ、

アニメとかでよくあるシチュね！」

「捕まっちゃった〜じゃねーよ！シチュじゃねーよ！何でハイテンションなんだよ！」

「電話越しでもツツコむの!？」 「明嬢つてすごいわね〜!」
「お前らふざげんなよ! 何で上機嫌なんだよ! 怖くねーのかよ!」

「怖い?」 「そうだよ! 怖くねーのか!？」

「明〜」 「明嬢〜」 「何だよ?」

「ものすごい怖い。変な人いっぱいいる。」 「じゃあ騒ぐなよ!」

クソ・・・何なんだよ。何で元気なんだよ。

「で、そーゆー事だから、今から 公園来いよ。一人でな。」

ブチッ ピーピーピー

「チッ・・・切りやがった。」

ドンッ バタバタバタバタ

「世話かけさしやがって・・・。てか公園遠いな」
バタバタバタバタ

頼むから無事でいてくれよ、梨華。薫。

「あ、来た来た。明ちゃ〜」 ドガッ!

「梨華と薫どこだコラ。」 ゲシッ ゲシッ 「ちよっ、まっ。イテッ」

「やめる。女どうなつてもいいのか?」 「あ?」

昨日コイツ居なかったな・・・こいつがボスか。

「いや、昨日仲間が世話になつたつて聞いてな。

うわ〜こりゃいい女だね。上玉だな、すげー好み。」

「はいはいそーですか。お前の好みなんて知らねーよ。さっさと二人返せボケ。」

「そういう訳にはいかねーな? 一つ頼み聞いてくれねーと。」

「頼み？」 「お前、俺の女になんねーか？」
「なるわけねーだろ、調子のんなよロリコンが。」
「うひょ〜即答。気強い女は嫌いじゃねーぜ？」
「お前みたいな男は嫌いだけどな。」

さあ・・・どうする？

へたに手出したら、二人があぶねーな。
面倒な事になった・・・。

第十八ラウンド「絶体絶命」

「で、二人返せよ。」

「ああ？お前まだ自分の立場分かってねーの？」

「分かりたくもねーよ。」

「ご主人様とか言ってみ？」 「黙れ、喉つぶれて死ね」

「はあ、こりゃちょっと立場分からせねーとな。」

・・・ヤバイ、時間稼ぎ無理だ。

ほんとどうするかな・・・。

「女連れて来い。」

ああ。そうだ、梨華と薫！

怪我してねーかな・・・してたらコイツ殺す。

てか、人数多っ！10人ぐらい居んのか？こっちは女一人だっつーのに

「ああ明〜」ニコニコ 「明嬢〜いらっしやい！」ニコニコ

「お前ら一生捕まってる。」

「嫌だね」「嫌よ！」

「分かってるよ。笑ってんじゃねーよ！縛られてんじゃねーか」

「うん、これ肌に食い込むよ？痛いよ」「跡が残るじゃないの！」

「知らねーよ。そこだけかよ心配すんの」

「おい、分かったか？お前は今、友達を人質に取られてんの。あんま逆らわねー方がいいぜ」

「だから、私達はいい。早く逃げて！」

・・・梨華、薫。

私は逃げねーよ。

「ふざけんなよ、逃げるわけねーだろ。」 「でも！」 「明嬢！」

「ゴチャゴチャうるせーよ、お前らがピンチだったら助ける。」

「私達はいいの！」 「いいから早く逃げなさい！薫様からの命令よ！」

「何でお前の命令聞かされんだよ、私は嫌だからな。」

「私、明に傷ついてほしくない。」 「そうよ！」

「私だって同じだ。お前らに傷ついてほしくない。それ以外に理由なんていらねーだろ」

「ギヤーギヤーうるせえんだよ！」 バツ！

「明（嬢）！！！！！」

「・・・つてーな。それ木じゃねーかよ、最悪、血出てきたし。」

「明！そんな人達やつちやっついていいよ！」 「コテンパンにしなさい！」

「何でだよ、お前ら助けるって言ったろ？馬鹿か。」

「だって血出てる！」 「逃げて！」

「嫌だって。馬鹿か、血ぐらい出るって。」

・・・意外に頑固だなコイツら。

逃げるわけねーだろ、お前ら追いてなんて。

ああでも、マジでどうする私？

コイツら本気だぞ？てか何で武器が木なんだよ。

素手の倍ぐらい痛てーぞ？

第十九ラウンド「女の演技」

「ほらほらよそ見してんじゃねーよ!」バキッ

「っ・・・それいちいち痛いんだよ。」

このままじゃマジでヤベエぞおい。
どうする?どうするよ。

「どうだ。俺の女になる気になったか、お嬢ちゃん」

「んな訳ねーだろ、うぬぼれんなよド変態が」

「そうか。おいお前ら、やれ。」

「了解したぜえ」バツ!

「おいコラテメエらしい加減にしろやああ!!!」

・・・はっ?誰・・・え、薫!?

薫あんなキャラじゃねえよ?どうしちゃった?本当にどうしちゃった?

「さつきから私の明嬢に傷つけやがってよお!おおコラ!?!」

「な、何だコイツ?急に・・・!」

「おいコラテメエだよテメエ!そこの顔色悪いオヤジ!」

「あ?何だお嬢ちゃん?可愛い顔が台無しだよ?」

「それだよそれ!そのホストみてえな古い口説き文句ウゼエんだよ
ハゲ!」

「ああん?何だとテメエ」

・・・馬鹿かアイツは!

縛られて、絶体絶命だつてのに何であんな強気なんだよ！
てかアイツあんな事言う奴じゃねえだろ。

「って感じでどうかしら明嬢！私、演技上手いでしょ！」

え、演技？

「あ？演技？舐めてんのか嬢ちゃんよお」

「舐めないわよ！汚いわね！」 「そつちじゃねえぞ・・・薫。」

何やってんだよアイツは・・・！

ついツッコむ所だったじゃねえか。

「お前さんたち！いい加減にしようよ！つてあれ・・・？」

今度は梨華かよ！もう騙されねえぞ。

梨華はあんなキャラじゃねえもん。てか演技ヘタだなおい。

「梨華さん！演技になってないわよ！ほら私に続いて！」 「アイ
アイサー！」

「おいコラボケコラ！はい！」 「ねえコラ！薫さんコラ！はい！」

「何で私よ！もうやめ！終わりよ練習は！」 「アイアイサー！」

「アイアイサーじゃねえよ！何の練習だよ。

てか薫は何で演技プロ級なんだよ。梨華はヘタすぎんだよ！」

ギャーギャー ワーワーワーワー

「おいおい嬢ちゃんたち？あんま舐めてもらつちゃあ困るぜ？」

「」「」「」「は・・・？」

「うるさいのよ何なのよ消えなさいよ！」 「そつだよ消えてよ邪

魔しないでよ！」

「あれ？いつのまにかお前らの前に来てる。縄ほどけるじゃねーか」

「おい！何であの女ほつといたんだ！」

「いやぁ・・・何かツッコミながら走っていくもんで・・・」

「馬鹿かお前らは！」ドガツ　「ぐっ・・・」

「やっと縄とけたよ！ねえこの人達どうする明！」

「馬鹿ね梨華さん！決まってるじゃない！」

「ああ、決まってるよ。私のケガは別にいいけどな・・・」

ザッ

「梨華と薫が縄の跡、痛いって言うてんだ。それだけでぶん殴る理由になるよな。」ギロツ

「ああ、しょうがねえ。いい女なのにな。ここまで来たら正々堂々やってやるよ。」フッ

第二十ラウンド「最終決戦」(前書き)

チャラ男編、決着です。

第二十ラウンド「最終決戦」

「ほらほら、避けなきや当たるぞ。」シュツ シュツ
「分かつてるよ。黙れ馬鹿」ヒュツ ヒュツ

明と男の戦いが始まってから10分が経とうとしていた。最初は邪魔をしていた手下達も、明に倒され気絶している。いつもの明なら、こんな男一人、一発で終わらせる事が出来るのだが、

明が苦戦する訳は他にあった。

・・・コイツ。私に攻撃の際与えねえぐらい速い・・・!

「おらおらどうしたあ？避けてはつかだなあ嬢ちゃん？」シュツ！
「うっせえよ」ヒュツ

「チツ・・・いらつく女だ。スイスイ避けやがって、ハア・・・ハア。」

「お前みたいな奴の攻撃、くらう訳ねーだろ。ハアハア・・・ハア」

「その割には息があがってるぜ」ヒュンツ!

「お前もな!」シュン!

ドガッ

「チツ・・・やるねえ嬢ちゃん。俺に攻撃当てるとは、格闘技でもやってたのか・・・?」

「やってねえよ。何でお前そんなラスボス気取りなんだよ」ヒュン

パシッ

「女の子が回し蹴りなんてしちゃ駄目だろ。ほらよお！」

「くっ・・・離せ。触んじゃねえ変態。」

・・・ヤベエ。足つかまれた！

「さあ、動けなくなつた所で一つ聞くぞ。」

「何だよ。」

「あつちで固まつてる二人、あの女は本当に友達なのかよ」

「友達に決まつてんだろ。」 「そうよ！友達よ！」 「友達だもん！」

「ほお・・・知らない暴力男と戦つてる友達を、陰から見てるだけつてのが友達か。」

「それは・・・明嬢みたいに強くないし・・・」 「明を傷つけるあなたは許せないけど・・・」

「強いとか関係無くなね？お前らがただの臆病者だつて事だろうが！」

「・・・そうよ、私達は何も出来ないわ。明嬢をただ見守る事しか出来ない。」

「だけどね！私達は明を信じてる。だから、勝つて信じてる。」

・・・梨華。薫。

「信じる？怖くて何もできねえ奴に信じてもらつて、何の役にた・・・
くっ！？」

「よそ見すんなよキモ男が。」

「右足つかまれたまま全身で体当たりかよ。面白い女だな！」 「ビュッ

「お前、梨華と薫に臆病だつて言ったな。」 「ヒュッ

「怖くて何もできねえつて言ったな。」 「ビュン！」

「ぐっ・・・みぞおちを！」

「私が、二人に信じてもらつても、役にたたねえつて言ったな。」

「ああ、言ったぞ。それが何か？」

「役にたたねえか、どうかなんてなあ！お前が決める資格はねえんだよ！」ビュッ！

バキッ。

「うわ、痛そつ！回し蹴りモロにくらったわ……。」「南無阿弥陀仏だよ！南無阿弥陀仏だよ！」

「ほら……。帰るぞ。馬鹿共。」「

」「……はいつ……！」「」

第二十ラウンド「最終決戦」(後書き)

これでチャラ男編終了です！

第二十一ラウンド「チヨコの中の思い」(前書き)

バレンタイン編スタートです！

第二十一ラウンド「チョコの中の思い」

2月14日。女の子が好きな人や、友達に思いを込めたチョコをあげる日。

一見、可愛いイベントに見えるが、女たちの戦いはすでに始まっていた。

そう、自分の好きな人にチョコを食べてもらえるか、必死だったのだ。

一番必死なのが・・・。

はぁ・・・。あいつら遅いな。

てか、何で私はいつも一番なんだよ。

よし、明日は遅れてやろう。

ワーワー ギャーギャー！

あ、来た来た。何か喧嘩してるな・・・。

「おはよ！突然だけどチョコ食べて明！」

「一番先に渡すのは私よ！明嬢食べて！食べなさい！」

「ちょ・・・お前ら何だよ。ああ・・・今日バレンタインか。」

「忘れてたの明？チョコ食べる？」

「って事は明嬢はチョコ用意してないの？ほら食べる？」

「何で会話の最後に食べるか聞くんだよ。馬鹿かお前ら」

「だって、一番先に食べて欲しいんだもん！」

「明嬢に食べてほしいのよ！」

「悪い、私甘い物苦手なんだよ。梨華知ってるだろ？」

絶対知ってるはずだ。毎年私がこう言うの聞いているはずだから。

「知ってるよ！だから何とね！今年はチョコの中に塩いっぱい入れたんだ！」

「うわ、馬鹿がいる。ここに確信犯の馬鹿がいるぞ。」

「梨華さん！それ・・・ナイスアイデア」

「じゃねえよ。塩とか何考えてんだよ梨華。」

食える訳ねーだろ。あ・・・でも。

せつかく作ったんだよな二人とも・・・よし今年は食うか。

「分かった。貰うから。」

「どつちのを先に食べるの!?!」

「両方同時に食べるから黙れ。」

「今食べて!?!」

「今?・・・分かったよ。」ガシャガシャ。パクッ

「・・・どう!?!」

薫のチョコマジで甘いし

梨華のチョコ超しょっぱいし・・・何かまざって変な感じになっているぞこれ。

「うまいよ。サンキユ」

「本当!?明大好き!来年は塩増やすね!」 「それは止める。」

「ふふふ・・・色んな甘い物混ぜた成果が出たわね!」 「だから

かお前コラ。」

学校。靴箱にて

「うわ・・・靴が見えねえ。しかも全部女子だし・・・。」

「私も・・・あ、全部男の子から・・・。」

「わぁお!私もよ!全部名無し!?!何か怖いわ!」

相変わらずモテる三人は、教室に行っても、どこに行ってもチヨコチヨコチヨコ、色んな人にチヨコを貰うのであった。

放課後。

「ああ……疲れた。チヨコ重いし。食べねえよこんなに……」
「私も……チヨコが……嫌になりそう!」
「これぞ、戦いね!さて!このチヨコ明嬢に全部あげるわ!」
「殴るぞ薫。」「あらま!」

……殴りあいより疲れるぞこれ……。
去年より多くなってるし。
こんな日はあの場所へ行くしかないな。

生徒会室。 ガラッ

「あ、よお明、梨華、薫。」 「おお優。来たぜ……疲れたからな」

「うん……来ない方が良かったんちゃうか。」 「え……?」

「……恵梨が酔ってんねん。チヨコに酒入ってたみたいで。」

「マジかよ!恵梨酒弱いつてのに。」 「大変だね……。」
「?、?何で大変なのかしら?」

「恵梨はな、酔うと仲がいい女子にしつこく絡むからな。」 「そうなんだよ……。」

「そうなの!?大変ね!というか、恵梨さんと皆さんは?」

ああ、そういえば優以外誰もいない……。恵梨もいないぞ?

「ああ、恵梨と俺以外は何か見回り。恵梨は今トイレ行ったからすぐ戻ってくるよ」

「よし、恵梨が戻ってくるまでに帰るぞ。」 「アイアイサー！
！」
ガラツ 「！！！！！！！！」
「あれれ？来てたのお？いらっひゃい。」 ニコニコ
「え・・・恵梨さん？どういう事なの？雰囲気が違うよな・・・」
「ああ、言い忘れてたけど、恵梨は酔うと乙女になるんだ。」 「
何ですと！」

「ああ～三人は今日も可愛いな～ねえ優？」 「そうやな。お前寝
とけ。」
「え～嫌だよ～。アタシは今から三人とイチャイチャするのぉ～」
キヤハハ
「ああ、悪いな恵梨。私ら帰るから。」 「え～何でそんな事言っ
のぉ～」

あ、ヤベエこつち来た・・・。最悪だよ、酔った恵梨は何言っても
聞かねえからな・・・。

ねん！」

「「優さん怖い……。」」

ガラッ

「ただいま。」 「あれ？明達来てたんや、」

「おお、来てた。それより愛。恵梨を離して。」 「OK。」

「おい、恵梨。明を離れたれよ」 「えゝ嫌だよ」

「うわ、恵梨酔ってる。最悪や。」 「誰やチョコに酒入れたん」

「え！？私だけど！」 「お前か桃！何しとんねん！」

「味に自信なかったからさ！酒でごまかした！アハ……ハ」

「ごまかすな！何で酒でごまかそうとすんねん！恵梨酒アカンの知つとるやる！」

「面白そうだしさ……ハハ」 「はつきり言って、アホ。」

「愛！お前には言われたくない！」 「何だと！」
ギヤーギヤーギヤー

「あのさ、いいから恵梨を離せよ。」

「あ、忘れてた。恵梨、離してあげたら？」 「嫌だ！杏！アンタに抱きついてもいいの？」

「それは嫌だけど……。」 「いいから離れろや、落ち着いて話も出来ひんやる」ギロッ

「ひえ……美由怖い。」 バッ 「お、サンキュ美由！」

「ねえねえ皆さん！誰かにチョコあげたの？」

「生徒会と、あんたら三人に。」 ガサッ 「あ、ありがとう。」

チョコ渡した後

「で、それ以外は？誰かに渡したりするのかしら？」 「気になるねー！」

第二十三ラウンド「桃の恋」

「……………」

静まり返る生徒会室。

沈黙に耐えられなくなった桃が話し始める。

「えっと……………3年の先輩なんだけどね！すごく優しくして！好きなんだ！頑張ってチョコ作った！」
「はあ……………」

愛がため息をつき、椅子に座った。

「え！？そんなにおかしい!？」

「まさか桃に……………好きな人が……………」
「おかしい……………世界がおかしい……………」
「え!？」

騒がしくなる生徒会。

一方、明達は呆然としていた。

マジかよ……………桃に好きな人……………?

桃ってそういうの興味ないと思ったけどな……………。

まあ、応援するか!

「で、あげるんだろ?早く行って来いよ。」

「うん……………そうだね!行ってくる!」
ガラッ

「行った……………あの桃が。告白に!？」
「杏、お、落ち着けよ。」

も、桃は大丈夫……………」

「おい愛。お前も落ち着けよ。噛みすぎやぞ。」
「気になるな。」

あの馬鹿桃が。」

「美由(ひどいね)」「恵梨はまだ酔ってんのか!」

「……………見に行ってみる?」「お……………おう。」「心配やしな……………」

「……よし！行こう！」「……」
ガラッ バタバタバタ
「行ったね……」 「行ったわね……」 「帰るぞ。これは生徒会に任せる。」
「えくみたいよ！」 「行きましようよ！」 「あいつらには、あいつらだけの世界があんだろ。」
「何か明嬢すごいカツコいいわ！神！」 「神神！」 「殴るぞお前ら。」

「先輩！頑張つてチョコ作ったんだ！食べて！」
「ああ……あざーす！じゃあねく桃ちゃん！」

「何かチャライな……」 「ヒソヒソ」 「チャライっていうか、アイツ悪い噂ばかりの男やで」
「え！？どういう事優！？」 「アイツ、気に入った女を手当たり次第……って奴。」
「人間のクズだな。」 「美由！？厳しいねく」 「お前は酔ったままか。」
「まあ……桃が選んだ男やし、見ておこつ。」 「あ、桃が帰るぞ……。」

「あつ！ミカ！待ってたぞく」 「あつ！ごめくんたくん！待ってた？」
「あれく？その汚いチョコ何く？」 「ああ、拾ったんだよ！行くぜー！」
ガンッ！ ガコッ！

「……」 「……」 「……」 「……」 「……」 「アイツ！桃のチョコミ箱に……」
「どつするー！？」「杏、どつするじゃないだろ。決まってる^^」

「お、やっと酔いから覚めたか恵梨。」 「じゃあ。」
「行くか……!」

「ちよつと待ちな。」 「あ?」

「3年D組、中田達也。」

なかた たつや

「数々の女を口説き、遊び半分で付き合ひ、泣かせてきた。」

「つまりあなたは……」 「……女の敵だ!!!!!!」 「……」

「な、何だよ!? 生徒会か! チョココぐらい捨てたっていいだろ!」

「チョコ……ぐらい?」 「ギロツ」

「全く、お前は何も分かつてへんな。」

「桃の指、見なかったのか?」

「桃はね、料理苦手だけど、頑張つて頑張つて作つたんだよ!」

「お前はその気持ち踏みにじつたんやで?」

「……」 「悪い子には……お仕置きだな!!!!!!」 「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ」

ガラツ

「ただいま桃。」 「ただいま〜!」 「おつす」 「よお」 「」

「ただいま……」

「……」 「桃?」

「……」 「ありがとう。見てたよ。」

「ええ!? ああ! どうつて事ないさ!」 「お、おお!」

「うわぁ皆が焦ってる〜! 似合わないな〜バカ!」

「何やねんお前! せつかく人が心配を……!」 「バカ! バカ! バカ!」

「桃は変わらないな……。バカ!」 「バカつて言う愛がバカ!」

バカ! バカ! バカ! バカ!

「お前ら全員バカバカうるさいねん!!」

こうして、ある三人の娘たちは、迷惑なぐらいにモテ・・・。
ある6人の娘たちは友情を確かめ・・・。
1人の失恋した少女は、隠れて泣いていた。

甘酸っぱいバレンタイン編。 E N D

第二十四ラウンド「男の初恋」

「好きだ。」

え、何・・・？何だ？

どうなってんだ。コイツが・・・私を・・・好き！？
えっと・・・、どうなったんだっけ・・・。

数分前。

「梨華、薫。帰るぞ。」

「「アイアイサー！！」 「いちいちウザいな。」
ザッ

「誰だ・・・ってお前！」 「・・・よお」

「よおじゃねえよ！帰れよ！」

・・・コイツ。確か、和宮^{わみや}瑠夏^{るか}・・・だっけ。
梨華の事嫌いとか言ってたよな・・・。薫の事も・・・。
で、殴ったんだっけか？

「消えるよ。」 「明嬢から怒りのオーラが！！」 「ひよえ〜」
「！！」

「梨華。ムンクの叫びみたいな顔すんな。」

「黒木明。好きだ。」

「はいはい消える・・・って、はあ？」 「好き！？」 「ほえ！」
「？」

「聞き間違いか・・・。帰るぞ2人とも。」 「「アイアイサー！」

！」「もういいし。」
「好きだ。」

・・・で、この状況か。

沈黙が怖い・・・。

薫の後ろからすごいドス黒いオーラが・・・怖い怖い。

梨華がすんげえ怒った顔してる・・・。

「あなたが・・・明嬢の事を好きですってビックフライ!?」

好きなの!?告白タイムは青春中!」

「え、何なんだよテメーら。てか何回も言わせんなよ・・・」

「何照れてんだよ。おい和宮。冗談はやめろ。」 「冗談じゃねえし!」

「声でけえんだよ!!」 「冗談じゃねえし」

「照れんなよ!」

あ、ヤベエ熱い。顔が熱い。

何なんだよコイツ。てか、今思ったけど背低っ!

「156cmで悪かったな!」 「心読めんのかよ。」 「読めるわけねーだろ馬鹿女!」

「生意気すぎんだろ。お前一応告白してんじゃねーのかよ。」 「うっ・・・」

コイツ、生意気な割にはちよつと言っただけで赤くなるな・・・。ヤベエ可愛いかも、楽しい。

「明嬢。」 「明。」 「何だよ?」

「私、明嬢以外の人、それも男の子に萌えてるわ!!もつと照れさせたい!」

「私も、何か瑠夏君可愛いよ!!虐めたくなる!」 「お前らドS?」

何なんだよコイツら。私が変なのかよ。

「おい、何なんだよ!早く返事出しやがれ!!」 「ギロツ・・・生意気。ムカツク。」

「あらあら、小さいワンちゃんに言われても、怖くないわよ?」 「なっ!?!犬扱いすんな、美並薫!」

「そんな生意気だと、告白もう一回してもらおうよ??」
「何でだよ!!ちゃんと・・・言っただろ／＼」

「何て言ったの??」 「それは・・・／＼」 「それは!」
「?」 「」

「う、うるさい!」

ダメだ・・・梨華達がSになっている・・・。

まあ、確かに・・・。

和宮は可愛いかもしれないけど・・・。
茶髪のクセツ毛。背が低くて・・・女みtainな顔だな。で、生意気か。

「見てんじゃねーよ馬鹿女!」

あ、ヤベ、いじめたくなってきた。

第二十五ラウンド「生意気瑠夏君」

「和宮。で、さっきの何だよ」「……………」
「何でそこで黙るんだよ。さっきのマジで何なんだよ」「……………」
「ゴニョゴニョ」
「え？何、聞こえねえ」「……………」告白だよ！！ちゃんと聞けよ
馬鹿女ノノノ」
「何で馬鹿女連発されてんだ私。」「
おお、ヤベエ楽しい。私ってこんな趣味ないんだけどな……………」
それにしても和宮生意気だな……………。小さいし。」

「和宮君！明のどこが好きなの！？」 「テストしてあげるわ！！」
「て、テストって何だよ！？」

「ほらほら、文句言わずに答えて！！明嬢の事、好きなんですよ！」

「おお……………分かった。で、く、黒木の好きな所……………」 「早く早く！！」

「いや……………友達思いで……………強くて。」 「それでそれで！？」

「皆に好かれて……………俺にもすんげえ怒ってたしさ……………それに。」

「……………それに！？」
「……………可愛いな……………つと思つたノノノ」カアツ 「実によるしい！！」「何だよ！？」

「可愛いな……………！？私がかよノノ」 「実によろしい！！」「
「黙ってるお前ら。」

「うん、でも実際、明嬢は私の恋人なのよね」 「違うから。」

「明は私と結ばれる運命だしね」 「とかつけても違うから。」

な。」

うわ、梨華はともかく、薫がすんげえ怖いんだけど。

すんげえ変な事考えてそうだな……。まあいいか。面白いし。和宮生意気だし。

……。可愛いし。正直何か、虐めたいし。

「あ、大事な事忘れてたわ!!」ニヤツ 「お前今、変な笑い方した。怖いぞ。」

「そういえば、瑠夏君って私たちの事嫌いって言ってたわよね?」

「あれは……。前の話だろ。お前らの事あんまり知らなかったし……。。」

「前の話とはいえ、私は傷ついたのでよね。」 「……………」

「だから忘れるかわりに」。私たちの言う事聞いてくれないかしら!!」 「……………は?」

「私たちの言う事に従いなさい!絶対服従この四文字は最強よ!!」

「何で黒木に告白したのに、お前らの言いなりにならねーといけねーんだよ!!」

おお、和宮すんげえ正論。正しい。お前は正しいぞ。

おかしいのは梨華と薫だ!!いや……。私もだけどな。

「あ、瑠夏君!私は明の親友だよ!!」 「倉本梨華。知ってるよ、んな事。」

「だーから!!私たちの許可が無いと、瑠夏君は明に近づくことも出来ません!」

「え……。。」 「はあ……。!?!」 「梨華さん!良い事言った!!」

うわ、鬼だ。コイツら、和宮の弱み握って勝ち誇ってる。
和宮はどうすんだ・・・？てかアイツらは何で急にSに目覚めたんだよ。

「…………やる。」 「え！？ヤッター……………！！！！！！」
「雑用でも掃除でも何でもやってやるよ！！馬鹿女共！！」

「いや、雑用も掃除もさせないわよ！！」 「?????」

「ただ、私たちの気が治まるまで、癒してもらいます！！」 「？
????」

「全くもう、鈍感な犬ね」 「犬って呼ぶな美並薫！！！！」

「はい、口答え禁止。」 「は！？何でだよ！！！！」 「命令。
絶対服従」

「会えない。」 「明嬢。」 「萌える。」 「萌えるは関係ない
だろ。」

「という事で、今から瑠夏君を、気が済むまでいじめます！！」

「なっ！？何でだよ……！！絶対何もしねえからな！！！！」

あーあ。アイツらの策略にはまったな。

和宮・・・頑張れ。

ま、私も梨華の事嫌いって言われて、腹たってたし。
丁度いいかもな。

第二十六ラウンド「ド・ド・ド」

「そうね・・・じゃあまずは、ワンって鳴いてみてくれる??」

「は!? 何でだよ!!」 「服従の証。」

「服従してねーし!!」 「明嬢。」 「明。」 「何で私で脅すんだよ。」

「な・・・鳴くわけねーだろ。」 「ふん。」

おいおい、薫も梨華も何考えてんだよ。

あの生意気な和宮が、本当に服従なんてしねーだろ。

「別にいいのよ? そのかわり、明嬢への告白は無効になるわ!!」

「えっ!? 何でだよ!!」

「だって瑠夏君が、絶対服従の規則破ったんだもん!!」 「倉本梨華、お前こんなキャラだった!？」

「さあどうするの??」 「・・・わ・・・わ、ん。」

「何? ごめんなさい。聞こえないわ。」 「何て言ったの??」

わぁお、コイツら最悪。

敵に回さなくて良かった。

まあいいけど・・・何か和宮、可哀相かもしれないけど。

「わ・・・わんっ!」 「よくできました犬。」 「犬って呼ぶな!!」

「そんな赤い顔で言われても、怖くないわよ。」 「なっ／＼／＼赤くなつてねーし!!」

「じゃあ、照れてるのかしら??」 「照れてねーし!!」

おお・・・マジかよ。服従すんのかよ。

てか私はどうすればいいんだよ。あいつら暴走しすぎ。何考えてんだ??

「明嬢!!!」 「明!!!」 「え、何だよ。」

「悪いけど、瑠夏君とは付き合わないでね。」 「ヒソヒソ」 「は? 梨華??」

「これ以上ライバル増やしたくないから、二度と癒えない程の恥ずかしさを与えてあげるのよ」 「ヒソヒソ」

「もう、明(嬢)の事好きと言えないぐらい。」 「ヒソヒソ」 「わああ、お前ら最悪」

「まあ、実際楽しいんだけどね。」 「私は、明嬢一筋だけど、あの子を虐めるの楽しいわ。」

「結局楽しいんじゃないか。」 「アイアイサー!!!」 「何の返事だよ。」

「じゃ美並薫、行って参ります!!!」 「倉本梨華、行って散ります!!!」 「散るなよ。」

「あ、そうだ!!! 瑠夏君にピッタリの物があるのよ!!!」 「何だよ...」

「チャラララッチャラ」 「犬耳!!!」

「倉本梨華。美並薫。やつぱり嫌いノ」

「ほら、つけてみなさい犬!!!」 スタスタ ビクッ「犬って呼ぶな!!!」 ザッザッ

「何で後ろに逃げるの? 待ってよ。」 「待つ訳ねーだろ!!! 何だよそれ!!!」

「私の家、コスプレ喫茶なのよ!!!」 「知らねーよ...」

あーあ。和宮。完全に遊ばれてるな。

てか何で私は大人しく見守ってたんだ?

てか薫は何で犬耳、学校に持ってきてんだ？
和宮の顔がどんどん真っ赤に……。

「俺はんな物つけねー！！黒木、話は今度だ！！」ダツ 「待ちなさい！！」

ドンツ ガシャーン！！

「あ……机につまづいてコケた……。」「瑠夏君何やってんの！？」

「和宮、大丈夫か！？」「ッテー！！もう帰るからな！！」ダツ

「させるか！！」「ヒュッ

ガシッ

「は、離せよ！！」「瑠夏君、女の子みたい。」「腕も細いわね。」「

「うっせえ黙れ／＼／」「ま、逃げようとした罰として……。」「

「はい！！強制！！」「スポット」「な、外せよ馬鹿女！！」

「すぐく……。似合うわね！！犬！！」「犬じゃねー／＼／／」

「犬だ犬！！可愛い〜犬耳似合う〜」「うっせえ黙れ！！離せよ！！！」

「う〜ん。犬らしくなって来たわね……。」「でも、生意気だね〜」

「早く手離せよ！！」「離せばいいじゃない。それぐらいの力あるでしょ〜？」

「……。」「あ、私達が女の子だから、抑えてくれるの？ありがと！！」

「うっせ／＼別にそんなんじゃないし！！」

「でも、逃げなくて正解よ。写真撮るわ！！」「撮るな！！」カシャ

「逃げたら、可愛い〜事になるわよ〜」「あだ名は犬だね！！」

「テメーらやつぱは嫌いだ！！これも外せよ！！」
「だから、そんな格好で怒られても怖くないわよ。犬。」
「っ／
／／」

わああ、コイツらヤベエ。

てか和宮がいつの間にか、犬らしくなってきたる……。

ワンって鳴いて、犬耳つけてんだもんな。

梨華と薫に捕まえられてるし。

ドンマイ和宮。

てか、私どうしよう……。

一応告白されたんだよな……。

第二十七ラウンド「帰り道」(前書き)

明の過去編へ向けての、準備話ですかね？

ショック受けるかな。それとも怒るかな…昔のあの人みたいに。
てか、何で和宮が知ってるんだ…。いつバレたんだ…。
もう、お別れだな…コイツらとも。

「分かった…話す。でも、今度の休みまで待ってくれ。」
「分かった。」

今度の休み…。あと3日。あと3日で、コイツらとも…。
絶対、私から離れるに決まってる。
あんな事聞いたら、離れるに決まってるからな。

「明〱これからも友達でいようね〱」 「何だ急に。」 無理に決まってる。

「明嬢！いつか結婚してね！」 「何だよ。」 出来るわけ無い。
「明〱好きだよ〱」 「はいはい分かったよ。」 それももう終わり。

「明嬢！私は世界一明嬢が好きよ！」 「お前が世界一かよ。」
友達〱こっちは終わりだ。

分かってる。無理だっけ分かってるけど、願ってる。
コイツらと離れたくない。

馬鹿で、マイペースで、どうしようもないけど。
ちゃんと自分を持つてる、優しくて元気なコイツら2人。

でも、もう終わりだ。

もう二度と。

私に幸せは来ないから。

第二十八ラウンド「隠された真実」

「お前、家族が居ないのか？」
あの時、和宮は私にこう言った。
何で知ってるのか分からない。
誰にもバレないように、家から離れた高校を選んだのに。
誰にも、梨華にもバレないように、家に来させなかったのに。

「明〜！」 「明嬢〜！」

今日は、土曜日。

学校は休み。周りから見れば、女子高生の楽しい休日に見えると思う。

でも、私から見れば…真実を話す、辛い休日だ。

「…おう。じゃあ、着いて来い。」

「「アイアイサー!!!」 「……………」」

スタスタ スタスタ スタスタ スタスタ

「明嬢…まだなの？」 「ああ、もう少しだ。」

「私、明の家行くの初めてだ。」 「ええ！？梨華さん長い付き合いなのにな…。」

「私が、呼ぶの嫌がってたからな。」 「すごく家が汚いのかしら。」

「違う馬鹿。」 「フフツ…やっとツツコんでくれた」 「……………」

…。

「着いた。」 「「え…？」」

ビックリするよな…。

あちこちに、「金返せ」「貧乏人」「泥棒」

私を否定する張り紙ばっかだし……。
でも、これが私の日常。もう、慣れた。

「今まで隠しててゴメン。私には、母親は居ない。」

「……何で？」 「小学生の頃に出てった。」 「そう……。」

「父親は……あの人は中学入った頃、借金残して消えた。時々女連れ
て帰ってくるけどな。」

「……………」

本当は、話したくない。思い出したくない。

でも、コイツらにいつまでも嘘つきたくない。
ずっとずっと、長い間嘘ついてた。

何も無いような顔して、鈍感なフリして。

それは、もう終わり。

今からする話は、黙って聞いてくれ。昔から、あの人は女好き
で酒癖が悪くて、

気に食わない事があるとお母さんを殴ってた。それが、すげえ嫌
だった。

「いい加減にしてください。毎日毎日お酒ばかり飲んで ……！」

「うるせえ！ どうしようが俺の勝手だ」 「バシッ」 「キャアッ！」

「なあ明。お父さんは悪くないよなー？」 「ジロッ

「黙れ。」 「チッ。生意気なクソガキが！」 「バシッ」 「……………」

「気持ち悪いガキだな。泣きもしねえ。」

そんなある日、お母さんは出て行った。手紙残して。

「明へ、お母さんはもう無理です。ごめんなさい。」

あの人と仲良くして下さい。お金を置いていきます。」

お母さんが出てってから、あの人はますます荒れた。酒のみまくって、借金作って、毎日暴力。で、私が中学に入った頃、女と出てった。

「明。俺は出てく。後は頼んだぜ。」ハハハッ

「出て行く前に、借金返せクソ親父。」

「チッ。本当にお前はいつまでたっても生意気なガキだな！」

「ねえ、まだ用意できないの…この子誰？」

「娘だよ娘。」

「ふん。綺麗な子じゃない、捨てるの？ダメなお父さんね。」

「ふん。良いのは顔だけで、ちつとも素直じゃねえ。」

「こんな娘、居なきゃ良かったよ。」

「こつちだってお前の娘ってだけで絶望だけだな。」

「最後の最後まで…生意気な口叩くんじゃねえ！」バキッ

もちろんその時の私は、生活どころか、学費さえ無かった。中学生だったから、バイトも出来ない。

でも、梨華。お前には知られたくなかった。

私は、毎月送られてくる母親の金で生活してた。でも、それは全部、生活費と学費。

借金はちつとも減らなかった。

「黒木さくん？いい加減に金返してもらえませんか？」ドンドン

「近所迷惑。叫ぶな」「あー。そっかお父さん出て行ったんだよね。」

「それがどうした。」「だったら、君に返してもらわないと。」

「あのクソ親父探して金取って来いよ。」

「そんなに暇じゃないんだよ。それに、親が借りた金は子が返す。常識だろ？」

私がまだ子供だったから、少し口調が優しい奴も居た。でも、中には全然変わらない奴も居た。

「さつさと金返せって言ってるんだよ！！」 「金ないって言うてんだよハゲ。」

「何だこのガキ…怯えもしねえ。」 「何でお前にビビるんだよ。」

「ガキだと思つて手加減してたらつけ上がりやがって…ナメてんじやねえぞ！！」 バツ

パシッ

「あ？ガキだからってナメてんじやねえぞおっさん。」

その頃の私は、学校と家での態度が全く違った。家に帰ると、借金取りと喧嘩ばかりだった。

私は、喧嘩と力には自信があった。

男にも負けない自信が…。

その時、梨華は思っていた。

「明の背負っている物は、私には想像できない程、深いものだった。

何で、目の前の明は、こんなに段々と、スラスラと話せるのだから。」

第二十八ラウンド「隠された真実」(後書き)

少し暗くなります。

第二十九ラウンド「構わない」

私は、生きてく事に精一杯で、泣くとかそういうの無かった。ただ、逃げ出したかった。でも、私が逃げたらどうなる？

借金取り達、またお母さん見つけ出して、金奪うだろ？

それだけは嫌だった。涙なんて出なかった。

ただ、あの人の事がすんごい憎かった。

「おい、今日という今日は金返せ。」 「金なんてねえよ。親いねえんだぞ。」

「お前の親父、帰ってこねえのかよ。」 「たまに帰ってくるよ。クソ女連れてな。」

「ふん。哀れなガキだな。だが俺には関係ねえ。」 「知ってるわボケ。」

関係ない。私が毎日辛かろうが、私が必死で生きてようが、周りの人間には関係ない。迷惑だけはかけてはいけない。関係ないんだ。

近所の奴らも、怖がって引越して行つたよ。悪い事したな。借金取り達も、中には私に同情する奴もいた。

「可哀相なガキだな。同情するぜ」 「同情するなら金見逃せ。」
「それは無理だな。でも、お前程の美人なら他の方法でも……」ニヤッ
「帰れ死ね。」 「チツ、根性のすわつたガキだぜ。」

そんな事おかまいなしに、あの人は時々、ムカツク笑顔で帰ってきた。

「よお明元気か？」デヘヘッ 「元気な訳ねーだろ。帰れ。」
「相変わらずだな。どうだ〜借金の方は？」

「全然減ってねーよ死ぬ。」 「そう言うなって〜」デヘヘッ
「ボコンぞ帰れ。」 「それにしてもお前、中2だっけか？綺麗になつたな〜」デヘヘッ

「キモいウザイ臭い死ぬ。」 「てかお前、高校行けんの？」

「行ける訳ねーだろ金ねーよ。」 「可哀相な奴〜」ハハハッ
「誰のせいだ死ぬ。」

「てかお前、借金取り相手に喧嘩やってんだって？」

「お前のせいだな。余計な力ついたんだよ。」

「こりゃ頼もしいな。俺、帰ってきてお前に守ってもらおうかな」
ハハハッ

普通に話してても、どんどん溢れてくる憎しみ。

私は、いつか大人になったら、このクソ親父を殺してやろうと思つてた。

お母さんをあんな目にあわしたアイツ。

借金残して逃げたくせに、罪悪感のかけらもないアイツ。

憎い。憎い。アイツが…憎い!!!

我慢の限界が来たのは、中2の頃。

「…今なんつった。」 「あ？」

「今なんつったって聞いてんだよ。」 「は？何だお前。」

「帰ってくる？冗談でもそんな事言つか普通。」

「何だと？ここは俺の家だぞ。」 「笑わせんじゃねーよ。お前とはもう縁切ったし。」

「調子に乗るなよクソガキが！けっ、可愛くねえ女だぜ全く。」

「いつまでもガキ扱いしてんじゃねえよ…やっぱ最低だなお前。」
「…なあ明〜。俺にも限界があんだよ。いくら娘でも、マジになるぜ？」ジロツ

「は？なら私にも限界がある。本気で殴っていいのかよ」「ギロツ

私は、力の制御が出来なくなっていった。
気づいた時にはアイツの上に馬乗りになって。

「誰のせいで、母さんが傷ついたと思ってんだ！！」「バキッ

「誰のせいで、高校にもいけないと思ってんだ！！」「ドカッ

「ほんととは、梨華に隠し事もしたくなかった！」「ボコッ

「本当は、愛されたかった！愛のある家族が欲しかった！！」
バ
キッ ドカッ

…家族の事で悩んでた。

色んな事があって、私は初めて泣いた。

色んな感情が弾けて、でもしばらくたって思った。

こんな思い、もうしたくない。

嘘でもいい。許そう。父を。

憎んで何になるんだろう。金になる？ならない。 食べ物になる？
ならない。

ストレスに、なるんだ。

本当は、憎い、殺したいぐらいに憎い。

でも、隠そう。嘘でいいんだ。

私は、幸せなんだ。

こうして、自分に嘘をついて、

偽りの黒木明が出来ていった。

神様、私は、間違っているんでしょうか。

ただ、アイガ ホシイ ダケナノニ。

第三十ラウンド「二人の決意」

でさ、私。馬鹿なんだよ。

どうしても梨華と高校行きたくて、お母さんに頼んだんだよ。

お母さんは絶対、「それで少しでも私のした事が許されるなら。」
って言つて、金出してくれると思ったから。卑怯なんだよ、私は。

よく考えてみると、借金取りは悪い事してないんだよな。

仕事なんだよな。

自分勝手に行動して、親殴つて、色んな奴傷つけて、梨華に隠し事
して。

本当に、私つて最低な人間だよ。

だから、お前らも、もう私に付き合わなくてもいいよ。

私は平気だからさ。

「明の馬鹿！」 「…え？」

「そんなに苦しんでたのに、なんで黙つてたの！？そりゃ、私は頼
りないけどさ！」

馬鹿なりに考えて、明と一緒に悩みたかったよ！」

「梨華には、関係ないだろ。」

「関係あるよ！だって私、明の事大好きだもん！誰が何と言おうが、
世界で一番明の事が
大切なんだもん！」

「嘘だろ、そんな奇麗事。」

「奇麗事でいいよ！でも、私の気持ちは嘘じゃない！」

何で昔から、何も言ってくれないの！？、どんな時も笑って見せて、ちっとも頼ってくれない！

もつと色々、相談してくれてもいいじゃんか！」

「サンキユ。でもな、私だって言いたかったよ？でも嫌だろ。」

「明嬢。」 「何だよ薫。」

「私は、梨華さんみたいに長い付き合いじゃないし、そこまで詳しく明嬢の事知らない。」

でもね、分かるのよ。」

「何が。」

「明嬢は、誰よりも強くて、真っ直ぐで大人で、誰よりも、優しいじゃない。」

「違うんだよ。お前らは分かってないんだ。私のした事の重さを。」

「明は何も悪くない。よく考えてみなよ。本当に悪いのは誰なの？私は、間違ってるかもしれないけど、明を傷つけた人達が悪いと思う。」

誰も悪くないとか、そんな綺麗な答えはいらない。」

「私は、明の事を最優先で考える。だから、明を傷つけた人達は、どんな理由があつたとしても、同情なんてしない。許さないよ。」

「私もよ、明嬢。私はね、明嬢のためなら、人を傷つけたって構わない。」

「それに、明嬢は本当に人を傷つけたの？私はそう考える事が出来ないの。」

「明。とにかく、私たちはね。」

「明嬢の事が、好きで一緒に居るの。」

「大切だから一緒に居るの。」

「「あんたの事が必要だから、一緒に居るんだよ！」」

それから三人は、どうにか明の為になる事を考えた。

そして、三人の間にあった、大きな壁は、少しずつ、少しずつ砕けていった。

第三十ラウンド「二人の決意」(後書き)

明の過去編、まず終了です。

また出すかもしれませんが、少なくとも次からはギャク編です。

第三十一ラウンド「忙しい6人」（前書き）

久しぶりの生徒会メイン。やっぱり、過去編の後は生徒会を出したくなります。

ギャグ回にするはずだったので、微妙にシリアスに……。次回からはギャグ回です！

第三十一ラウンド「忙しい6人」

2月も終わりに近づいてくる。

この時期になると、卒業式の準備で忙しい。

もちろん教師たちもだが、生徒会はそれ以上に忙しいのだ。

書類作りから、来年の部活の予算案まで、全部生徒会がやる事になっている。

生徒会はこの時期を経験するのはこれで二度目。

普段は遊んでいるが、皆真面目に仕事をしていた。

そう、真面目に。

「杏！書類は！？」 「ごめん優！今急いでる！」 「了解！」

真面目に。

「桃、仕事はどうだ？」 「やってるから黙って愛。」

「なっ！桃のくせに黙ってって失礼な！」 「お前も充分失礼や！ギャーギャーギャーギャー」

真面目に。

「仕事しろやお前ら！！」 「えーだつて、恵梨寝てるしさ」

「はあ！？アイツ会長室にこもってると思ったら寝てんのか！？」

「うん。熟睡してるよ。」 「何でやねん！ちよつと行って来る！仕事しといて！」

「うん。分かったよ優。気が向いたらするよー。」 「気が向かん

くてもやれ!」

真面目に 。 やっている訳が無かった。

会長室とは、会長が落ち着いて書類を見るための部屋。
というのは名前だけで、ほとんど使っていない、昼寝部屋だ。

トントン トントン

「恵梨!。入るで。」 ガチャツ 「何や、起きてんのか」

「暇だからボーツとした。」 「暇やったら仕事しろよ。」 「
やだね。」 「ですよねー」

「どう?皆の様子。」 「ああ?いつも通りや。元気に暴れてる。」
「ふん。優は暴れなくていいの?」 「当たり前やる!仕事する
わ。」

「真面目だね。」 「...それでもないわ。」 「...そっか。」

優と恵梨の顔が、一瞬だけ暗くなった気がした。

「優、明達この頃来ないな。」 「あの三人にとっては、今が大事
な時期なんやろ。」

「ああ、やっぱお見通しだった?」 「当たり前。」

「優は変わってないな。今も昔も。」 「お前もな。」

「はっはっはー!」 「何やねんその笑い方。気持ち悪いわ。」

実は、会長と副会長は幼なじみ。

それと、愛と桃も幼なじみだ。 杏は中学の時から友達。
美由は気づけばそこに居た。

「会長。」 「会長！？その呼び方止める！」
「はははっ…。」 「優、…何かあった？」 「別に何も。」 「
ふん。」
「何やねんその疑ってる感じ。」 「だってさ、優って気持ちを顔
に出してくれないから。」
「…別に。顔に出して何か変わる訳でも無いやろ。」 「気休めに
はなるかもよ。」

「気休めに頼るぐらいなら、自分頼るわボケ。」 「人じゃなくて
自分頼るんだ。」
「人には頼らん。」 「自分だけを信じる、ってか？」
「人は信じない。でも、自分を信じるわけでも無い。」 「変わっ
てるな。」

「永遠に恵梨には言われたくないわ。」 「ですよー。」
二人の間に、少しの沈黙が生まれる。
二人は、同時にこう言った。

「…さて、仕事しますか！」「…」「ハモんなやお前！」

その後、生徒会は必死で仕事をしたそうな…めでたしめでたし。

第三十二ラウンド「脅迫状」(前書き)

恵梨「何でアタシらが六人とも関西人だって質問多いな」

美由「偶然だ偶然。気にするな」

優「いや、気にするやる」

桃「そんな事気にしてたら小説なんて読めないよバカ！」

優「何で逆切れやねん」 杏「まあまあモチついて」

愛「何でモチつくんだよ」

今回は、生徒会編(一応優編らしき物)です。

第三十二ラウンド「脅迫状」

3月の初めの頃。

生徒会には仕事がある程度終わり、またいつものダラダラ生活に戻っていた。

「よし、今日こそは仕事するからなー」副会長が言う。

「分かってるって！大丈夫！」会長が言う。

「やる訳無いけど。」美由が言う。「やらのかい！」ワイ

ワイワイワイ

ガチャッ

「はあー疲れたー！！！」「おいコラ恵梨、まだ何もしてへんやる。」

「いや、マジで疲れたって！アタシ頑張ったよ！」「何を頑張ってるん！寝る事か！？」

「あーもう分かった。はいはい、そうですよアタシが悪かったです。」

「何で私は大人ですーみたいな反応してんねん！ガキがお前！」

「二人は相変わらずだねーって何これ？」「ん？どうした杏。」

「いや、これこれ。」「んー??？」

杏と愛が、何かを見つけたようだ。

「副会長へ…って書いてるけど、優の事だよね？」「！！！！」バツ！

「わっ、何？どうしたん優？」「ああすまん、何も無い。気にせんといて」「ニカッ

ポイツ 優は封筒に入った手紙らしき物を、ゴミ箱に捨てた。

「ええの？」 「ええの！さ、仕事すんぞー」 「イヤイヤダー！」
「アイアイサーみたいに言うな！」

それからしばらくして、優が職員室へ書類を届けに行った。

「…なあ皆。」 恵梨が全員を呼ぶ。 「ん？何？太った？」

「よし、桃、後で殴る。」 「冗談だつて！優の事でしょ？」

「何や…やっぱ分かってたか。」 「この頃、ちよつとおかしいから。」

「アイツ、何でも一人で抱えるからな。」 「頼ってくれてもいいのにな。」

いつになく、真面目な雰囲気だった。美由でさえも真面目だった。

「なあ、さっきの手紙、見てみよか？」 こう提案したのは杏。

「それはさすがに優に悪いわ。」 否定したのは愛。

「まあね。聞いてみないと。」 珍しく愛に賛成する桃。

それから、見ない。という事になったが…。

「いやや、アタシは見るぞ。」 恵梨はいきなり封筒を開けだした。

「何や何や、恵梨ノリノリだな。」 「優に怒られるぞ。」

「アタシは、怒られてもいいくらい、気になるから見る。」

ビリビリ 「……………！！！！！！！！」 5人は驚愕した。手紙には予想と違うことが書いてあったから。

『どうも副会長。前の手紙は見てくれたかな？

あれからも、僕の愛は止まらないよ。君を愛してるんだ。

あと三日したら、返事を聞きに行くよ。いい返事を出してくれる
といいんだけど…。

あと、君の事だから、どうせ生徒会の連中には言っていないんだろ？
馬鹿な子だな…言っただじゃないか、君は僕だけの物だよ、子猫ち
ゃん。』

「何これ意味分からん。」 「変なストーカーか？」

「とりあえず脅されてるらしいな。」 「でも…こんなの言ってく
れば…。」

「何か嫌な予感がする…。」

ガラッ！

「…何、見とんの？」 「……あ。」 「……」 「ハモんな！
何見とんねんお前ら！」

「いや、すまん。てつきりアタシは優がカツアゲして取ったお金が
入っとんのかと…。」

「土下座しろお前。」 「え、…それはちょっと」 「本気にすん
なや！何やお前！」

「よし、犯人探ししよ…！」 「いや、ええから桃。」

「いや、犯人探ししようぜ！」 「恵梨も何でノリノリやねん。」

「…犯人探ししよう…！」 「杏まで乗るなや」

「たまには犯人探すか！」 「たまにはって何？愛はたまに犯人
探しとんの？」

「たまには犯人殺すか！」 「たまにはって何？美由、犯人殺し
たん？」

「……」 「お……」 「……」 「……」 「だから何やね
んお前ら…！」

こうして、仕事を無視した生徒会の、犯人探しが始まった。

第三十二ラウンド「脅迫状」(後書き)

生徒会メインです。

そろそろ生徒会のキャラも詳しく書きたいなーと思ったので。

第三十三ラウンド「犯人探し」(前書き)

セリフが多くなりますが、ツッコんでは大抵は優です。

今回は優目線で書きます。あと、コナンのセリフとかを入れてます
んで、

嫌な人はユーターンしてください。

第三十三ラウンド「犯人探し」

「よし、まずは聞き込みしよう！」桃が言う。「何でノリノリやねん。」

「だって最近暇だしー」「暇つぶしかい！」

犯人…か。

「てか優に脅迫状送るとか、犯人には恐怖と言う物が無いんか？」

「おい馬鹿会長、それどういう意味やねんコラ。」「うわー助けて愛ー。」

「助けるよ、ほんとにこの人は怖いねー。」「何でお前までボケてんの!？」

怖い…か。

「ただの暇つぶし…:というのは嘘で、優が心配なんだよねー」桃がニコツと笑いながら言う。

「そーそ、みんなツンデレやねん。」愛も言う。「うわ、お前らのツンデレ萌えへんわ!」

「ちなみに私はヤンデレだ。」「美由!？まさかのカミングアウト!？」

「優は私が守るからねー…:多分。」「多分て!杏、正直やる気ないやろ!」

心配…守る…。

聞き込みに向かう。

「お前ら本気でやるつもりなん？」 「「「もちろん！！」」」
美由以外が元気に言う。

「誰か一人サボったぞ今。」 「私だが何か。」 「分かっとなるわ
！」

「いや、犯人探しかほんまにええて。」 「何でー。」

「てか、何で隠してたん？」 恵梨が聞く。 「いや、別に何となく。」

「…ふん。」 「何やその顔。」 「杏のマネ。」 「え！？私
！？」

「杏、怒ってええよ。」 「恵梨ー！ー！！」 「うわ、杏が怒っ
た！」 ギャー

「ん？あいつらは何してんねん。」 「愛たち、後ろの方におるよ。」

愛、桃、美由の三人。

「なあ愛。」 「ん？何や桃。」 「愛って天然だよな。」

「はあ！？天然ちゃうし！何やねん！」 「いや、天然でしょ。」

「ちゃう！」

「天然だよー」 「違う！」 「てんん」 「しっこい！」 「バシッ

「いたつ！今天然って言う前に殴ったな！バーカ！」 「バシッ」 「何
やねん」 「バシッ

「うるさい。」 「ジロツ」 「ええ美由怖っ！」 「何やそのオーラ。」

ギャーギャーギャーギャー

「おい！何しとんねん！もう帰れやお前ら！」 「あ、優ー。聞い
てよ愛がー」

「違っだろ！桃が悪い！」 「どっちでもええわ！何や？何で喧嘩

!？」

「いや、愛って天然だなーって。」 「ム力ついたから殴った。」
「で、喧嘩になった。」 「ガキかお前ら！喧嘩の内容も、説明の仕方も！！」

「ああ、もうええ。生徒会室戻ろ。」 「嫌だ。」 「嫌だ。」
「何でこんな時だけ息ピッタリやねん！」

「優！真実はいつも何やかんやで二つ！」 「似てへんし、何で二つやねん！」

「おい桃、コナン馬鹿にすんなよ。」 「愛は何でキレんねん！」

「優、ツッコむの待ってや。ボケるから。」 「恵梨、お前ボケを予告すんなや！」

「皆、息あわずぞ！せーの。見た目は宇宙人。」 「何で宇宙人！？」
「ココロの中。」

「頭脳は変態男子中学生。」 「何かキモいのきた！合わす気ないやろ桃！」

「その女の見た目は！」 （愛、その名はやる！？てか女やったんかい！見た目は宇宙人やろ？）

「どこからみても萌えっ娘！」 （宇宙人ちゃうんかい！杏お前天然か！）

「その名は…！？」「」「」（お、コイツら美由に任せたな。）

「知らん。」 「美由お前空気読めやコラ！よし、順番にツッコむぞ。」

「まず恵梨！お前ほんまに息合うつと思たんか！？」 「うん。1%

は信じてた。」

「それ思てへんやんけ！それに何や宇宙人て！」 「知らんー。」

「無責任か！」

「次、桃！お前恵梨の答えフォローするどころか悪化させたな！？」

「え、何で？」ワタシ シラナイ 「何やその顔！お前のセリフ、リアルやねん！」

「で、愛！お前一番問題や。」 「は？何で？」

「お前コナン馬鹿にすんなー言うてたくせに、セリフ間違えとるやないか！」

「え？違った？」 「全然ちゃうわ！何や女とか見た目とか！」

「はははー」 「笑ってごまかすな！で、杏！」 「ん？」 「ニコッ

「何笑てんの！？天使みたいやけども！」 「ん？」 「ニコニコニコニコニコ」

「お前何か怖いからもうええわ！」

…何やねんコイツら。好き勝手ボケよつて。

のど痛いし。まあ犯人探し諦めてくれるかしらんし、まあええか。

「じゃあ。」 「……」 「犯人探し！！」「……」 「覚えとつたんかい！」

第三十三ラウンド「犯人探し」(後書き)

何か生徒会は動かしやすいw

優のツッコミで全部処理できるしw

次回はちょっとシリアス入ります。

第三十四ラウンド「犯人の正体」(前書き)

犯人分かります。

第三十四ラウンド「犯人の正体」

「はあはあ…疲れたね。」杏が息を乱して言う。

「うん…走り回ったから。」桃が苦しそうな顔で言う。

「疲れたし、犯人の手がかり掴めなかった…。」愛が悔しそうだ。

「死ねよ犯人。」美由も走り疲れて怒っている。

「アタシもう動けんよ。」恵梨は座り込んだ。

そう、生徒会はあれから30分間

全速力で校内を走り回り（校則違反）、生徒に会ったたびに、聞き込みをしていた。

「ちょっと待てお前ら。何やりきった、みたいな顔してんねん。」

優が後ろで言う。

「……………え?」

「いや、別に犯人探しはやらんでええ、てかやってほしく無いけどな。」

「……………うん」

「お前ら後半の方グツダグダやったん分からのか?」

「……………???」

「マジかお前ら!もうええわ!」

そう、生徒会は、最初の5分こそは真面目に聞き込みをしていたが、

25分前。

「はあー誰も犯人分かんないかー飽きたなー」桃があきらかに退屈そうに言う。

「マジかお前。飽きんの早いなっ!」優がツツコむ。

「うん。確かに飽きたね。」杏も言う。「杏、お前もかい。」
「私も飽きた。」と、愛。「愛、お前いつの間にボケになっ
てん。」

「飽きた。」「飽きた。」美由と恵梨も言う。

「お前らマジか！？開始五分で飽きるとか何やねん！いや、やって
ほしくは無いけど！」

それからというもの、全員のやる気は無くなり、

「あ、生徒おつた！。ねえーその女子ー。」「やる気ないな桃。」

「愛もでしょー？」「うるさい。早く聞き込みしろ。」

「えーと…好きな色は？」「関係ないだろ。」ゴンッ「いった
！コラ愛！」バシッ

ギヤーギヤーギヤーギヤー「はあ…もうええわ。」優は諦めた。

そして、今に至る。

「じゃあ、ちよつと休憩しよつか。」桃が言う。「働いた後のお
茶は美味しい！」杏が言う。

「いや、働いてへんけどな。」優が軽くツッコむ。

タッタタッタ「あれ？優？どこいくの？」「ん、あつちで飲む
わ。」

優は皆から離れた場所に座った。

優は、お茶を飲みながら、はしゃいでいる皆を見て、

何かを考えているようだった。

「ゆう。」 「ん？」 優が横を見ると、そこに居たのは杏だった。

「犯人、見つかるといいね。」 ニッコツ 「…おう、そうやな。」 ニッコツ

「優、お前、心当たりないん？ 犯人の。」 横から入ってきた恵梨が言った。

「…嘘つくつもりは無い。正直に言う。ウチほんまは犯人分かってる。」

優のこの言葉に、杏と恵梨はもちろん、まだ喧嘩をしていた桃と愛。犯人死ぬ、と地面に書いていた美由も驚いた。

「…誰、なん？」 愛が聞く。

愛の言葉に、優はニツと笑ってからいつも通りの調子で

「あのバカ兄貴やろうな。」

と、ハッキリ言った。

第三十四ラウンド「犯人の正体」(後書き)

はい、分かりにくかったかもしれませんが、
犯人は優の兄貴です。

第三十五ラウンド「元不良」(前書き)

優の過去にかるゝく触れます。
ほんとかるゝくです。

第三十五ラウンド「元不良」

「は…？兄貴？」桃がキョトンとしている。

「兄貴って…どういう事？。」愛が言うと、皆も頷く。

すると、優は一瞬だけ下を向き、ニコツと笑って

「すまん、ちょっと着いて来てくれるか？お前らには隠したくないから。」

「………うん？」「……」生徒会は優に着いて行った。

20分後。

「ついたよ。」優の一言に生徒会は顔を上げる。

「ひっ！」軽い悲鳴を上げる杏。他の4人も驚いている。

6人の視線の先には、たくさんの不良がいたからだ。

「あ？お前ら誰だ…心無さん！？」

不良の一人が叫んだ。不良たちが騒ぎ出す。

「は？何アンタら。心無って誰や。」恵梨がキレ気味に言う。

「…心無はウチや。」優が言う。

「………ええええええ！」「……」「やっぱり心無さんっスよね！……」

ワーーーーー!!! ワーーーーー!!!

「何!? コイツらすごいテンション高っ!」愛がビクビクしながらツッコむ。

「優! お前アタシらに偽名使ってたんか!? ほんまは心無って名前なんか!？」恵梨がテンパる。

「何でやねん。心無っちゅーのはあだ名や、あだ名。」「」「」「あー!。」「」「」

「どうしたんスカ!? もしかしてこっちに戻ってきてくれるとか!？」

ワーーーーー ワーーーーー 「おいおい勝手に盛り上がんなよ。優が言う。

「すみません…でも何でここに?」 「…バカ兄貴に会いに来た。」

そういうと、優は不良達の、ど真ん中を歩いていく。

「おお…」 「優が歩く所、不良達が道開けとる…。」
「不良のボスみたいだな。」美由の言葉に全員が反応する。

「……不良の…ボス?」「」「」

5人は思っていた。『心無、どこかで聞いた事のある名前…』

バキッ! ! ! ! !

優が進んだ方向から、すごい音がした。

5人と不良は、音のした方向を見る。

「さすが、腕は落ちてないな…優。いや…心無。」

「うっさいねん。今日はあのキモイ手紙の件で来た。喧嘩する気は無い。」

薄暗い路地の、一番奥の方で、

一人の男が、バットを持ち、優に襲い掛かっていた。

5人はその姿を見て、急いで優の元へ向かう。

不良達に睨まれたが、そんなのは気にしない。

「お？そこに居るのは優を俺から奪った、泥棒生徒会じゃないか。」

優に襲い掛かっている男は、生徒会の5人を睨む。

「誰もお前の物なんかになってへんわ。」優が男から離れる。

5人は状況がつかめていない。

「お前らも聞いたことがあるだろう？伝説の不良、心無。」

5人は昔の事を思い出した。

（そういえば、女一人で不良達を従えた、伝説の不良が居たと言っ噂があつたな…）

「中学時代、お前らは知らないと思うが、優は…」

「心無だったんだよ…バカな生徒会め。」

第三十五ラウンド「元不良」(後書き)

急展開ですいません。

この編が終わったら、完璧なギャグ長編になりますので。

第三十六ラウンド「心無復活」(前書き)

脅迫状編、完結です。

意味の分からないところは質問して下さいね。

後半、優目線&バトルシーン入ります。

第三十六ラウンド「心無復活」

「バカって言う方がバカだもん！」桃がベーツと舌を出す。

「お前空気読めよ。」愛が言う。「うーー。」

そんな生徒会を見て、優の兄はため息をつきながらこう言った。

「優、手紙に書いた事、考えてくれたか？」優の兄が言う。

「考えるも何も、NOに決まってるやろ。生徒会はやめへん。」

「「「「生徒会をやめる？」「」「」」

「生徒会、ほんとに何も知らないんだな。俺は、お前らを恨んでい
る。」

「私達、恨まれるような事したかな？」杏が戸惑う。「お前可愛
いな。」恵梨が笑う。

「優は中学時代、隠れた不良だった。

不良と言っても、そんなに悪い事はしてないけどな。

俺は、不良の先頭に立ち、強く美しい、優：いや、心無が大好き
だった。

なのに：高校に入って、生徒会に入って、優は心無を：不良をや
めると言い出した。」

心無：。優が心無と知って、生徒会は少し戸惑っていた。

「お前らのせいで、俺が好きだった優は消えた！心無だった優は消

えた！」ギロツ

「おお、すごい迫力！」 「ヤバー」 フザけた調子の生徒会。

生徒会が優の方を見ると、優はこっちを見て笑い、語りだした。

「うっさいバカ兄貴。コイツらは関係ない。全部ウチが自分で決めたんや。」

「恨むんやったら、ウチを恨め。」

「俺は今の優も愛しているよ。優は何も変わっていない。だって、今でも優は生徒会を守ろうとしている。心無の頃から、何も変わってないんだよ。」

変わってへん…か。確かにウチは…何も変わってへん。

人傷つけて、隠して、自分の思うままに動く…何も変わってへんよ。

…でも。

「ウチは、心無としてやってきた事も、心無として喧嘩ばっかしてた事も、

忘れる気はない。否定する気も無い。

でもな、ウチはもう心無ちゃうねん。

伝説の不良、心無としてじゃなく、生徒会の副会長、優として生きたいんや。」

「そんな事、俺が許さな」お前が決める事じゃねーよ。」

優の兄の言葉を遮さへぎったのは、恵梨だった。

「優がどう生きるかとか、お前が決める事じゃない。優が決める事やる。」恵梨が言う。

「その通りだよ。心無かココナッツか知らんけどな……」愛も言う。

「私らが知ってる優は……いつも笑ってて」杏が桃に繋ぐ。

「元気に仕事して、どんなにボケてもツッコんでくれて……」桃も美由に繋ぐ。

「頼りがいのある、生徒会副会長、それが優だ。」美由も真面目に言う。

「ふんっ……お前らはバカなだけじゃなく、考え方も甘いらしいな。

優は変わってなどない。優の中には、心無としての闘争本能があるハズだ。」

「結局、優は、心無なんだよ……!」

そう……心無……。

嘘の噂がいつぱい流れて、心無のほんまの姿を知ってる奴は少なかった。

どんだけ力を抑えたところで……ウチは、結局、心無なんや。

でも、人を傷つける為の心無はもう居おらん……。

「さて、ひっさしぶりに行くかー!」「」「」「?」「」「」「」

「優、やっとその気になったか…来い、心無！」

「手加減は、せえへんからな…」ボキッ バキッ

「ッシャーー！やんぞー！！」バコッ！

バキッ バシッ やっぱ、喧嘩って楽しいな…。ボコッ バキッ

バシッ ヒュンッ 心無として人傷つけんのはもうやめたんや。

バキッ ドコッ

これは、楽しいだけの喧嘩とちゃう。コイツら守る為の、人のための喧嘩。

「バカ兄貴ー！！！！死にさらせええ！！！！」ボキッ！！

「……」（しゅ、瞬殺…！優の兄貴ボコボコ（笑））「……」

5分後。

シーン 「…ふう。完了やな。」

不良、ザツと30人、10分かからず瞬殺。

「よっしゃ、帰るか。」 「……」 「うん！」 「……」

生徒会には、ウチが心無と分かってても、

変わらず優として扱ってくれる奴らが居る。^お
だから、ウチは心無に捕われず、笑って生きるんや。

「いやーしかし瞬殺だったな…。」 「えー愛？そうか？ケッコー
ゆっくりやっただやろ？」

「ええ！？ゆっくり！？怖っ！優怖っ！！」 「何でやねん！傷つ
くわ！バカ桃！」

「……………いやー心無マジ怖えー……………」 「ええ！？もう心無
ネタ使うん！？」

「……………当たり前……………」 「いや、普通ちよつと傷が癒えた
頃に使うやる！まだ早いやる！」

「だって、優は心無だろうが、最恐だろうが、優だろ？」 「おお
…恵梨。」

「って騙されんぞ！何や最恐って！！！！ちよつとええ事言ったら騙
せる思っなよ！！！」

第三十六ラウンド「心無復活」(後書き)

脅迫状編終了です。

次回から、春休み編。(完全ギャグ)

第三十七ラウンド「春休み」(前書き)

春休み編だー！ー！！

久しぶりに明達登場ー！ー！！！

生徒会は少し休ませます。(春休み編出るけど

第三十七ラウンド「春休み」

春休みが始まって3日目。

ツッコミから開放されて、休めると思っていた私がバカだった。

くく「また電話かよ…。」ピッ

「もしもし…。」「あ！明嬢く！？明嬢なの！？」

電話越しで叫ぶ、このウルサイ女…。

「私に電話掛けてんだから、私に決まってるんだろ！バカか！」

「ああ、明嬢なのね。あのねーパッパラピッピラピーー！！」

「おいコラ薫。お前フザけすぎだろ。切るぞ。」

「アイアイサー！あ、間違えた、おやめになって〜！」「自分のギヤグ間違えんな。」

「もう、うるさいわよ明嬢く明嬢に伝えなきゃいけない事があるの！！！」

「伝えたい事？」「あのね……………」

…何だ？

「今日も可愛いわね。」「切るぞ。てかお前今日私の事見てねーだろ。」

「声だけで分かるわよー可愛いって！！」「お前スゲーな。」

「でしょ！？だって明嬢の恋人だもの！！」「いや、違うし、褒

めてねーしな!？」

くだらない事で電話してくる…薰らしーな。
まー本当は優しい奴なんだけど…。

「ねえ、今度の休み、梨華さんの家に泊まりに行かない?」

「は?今度の休みって…今春休みじゃねーか。」

「あらまつまつマールブル症候群!」 「お前の喋り方がいまだに分かんねー!」

「まあ、とにかく泊まりにいきましょう!明日!」

「明日か…別にいいけど。暇だし。」

「ヒヤッホーイ!!!!!!」 「喜びすぎだろ。」

「フツ…黒木明、ついに私の物になったか…。」 「なつてねーし誰だよ。」

「んもう!は・ず・か・し・が・り・や!」 「ウツゼーよお前!」

「じゃ、そーゆー事だぞっ! (ほしほし) 星人!」 「お前の将来が心配だ。」

「べ、別に結婚してあげない事もないんだからねっノノノノ!」
「どこのツンデレだよ、話変わりすぎだろ」

「じゃ、さよーなら!愛する患者アツカーリ!」 「誰だよ。」

ピーッ ピーッ 電話でもテンションがおかしい…。

くく 「またかよっ!」 梨華か…。

ピッ 「もしもし?」 「愛する患者アツカーリ!?アツカーリな

の!？」

「アツカーリ広まりすぎだろ!何だよお前ら！」

「アツカーリだね。薫さんから連絡あつた？」

「おお、あつた。疲れるテンションの電話がな。」

「ハハハ!だよね〜!あの人は疲れるよ〜!」「マジで薫に敵し
いな。」

「って事だからさ!明日ヨロシクね〜!」

「おう、分かつたけど、何で急に?」

「べ、別に教えてやらない事もないんだからねっ／＼!」「お
前もツンデレかよ。」

「昨日、薫さんから電話がかかって来てさー。」

『あーもしもし?ライバルの天然さん?』 「って言ってきたから
さー」

「薫、完全にワザと悪意出してるだろ。」

『え?その声は変態妄想美人さん?』 「って言ったんだー。でね。
」

「お前もケンカに乗んなよ。てか最後褒めてるし。」

『私、そろそろ明嬢と一夜を共にしたいのよ。』 「って言われて
な。」

「アイツの表現ムダに卑猥こわいなんだよ。」

『え？私なんて何回も一夜共にしてますけど？』 「って言ってね
？」

「誤解されるような言い方すんなよ馬鹿。」

「で、そんな事言ってるうちに泊まりの件が出たんだよ。」

「へえ〜お前ら電話でもケンカしてんのかよ。」

相変わらず馬鹿な奴ら…。

「もう明がないと困るよ！」 「…あっそー。」

「って事で、じゃーねー絶望天使グロッキー！」 「最後変えんな
よ。誰だよソイツ。」

こうして、明達三人の、にぎやかな春休みが始まった。

第三十八ラウンド「梨華の家」

朝、11時。

そろそろ出るか…。借金取り来たら面倒だし。

ガチャッ

梨華の家に泊まり…か。

5〜6回目だっけ。

梨華んちって広がったよな〜羨ましい。

…ん？あれ…見た事ある奴が…。

えっと…あれは、美由と杏？

「あ、明〜！」「よお杏。美由も。」

「明か。」「どっか行くの？」

「おう、梨華んち泊まりに行く。」

「泊まり！？いいよね〜私達も遊びたい…。」「それならあのバカ共に言え。」

「バカ共…って、恵梨とか桃の事か？」「その通り！」「

恵梨…桃、また何かやらかしたのかよ。

「アイツらが仕事をサボっていたせいで、春休みなのに生徒会活動だ。」

「まあ今日で終わりだと思っただけだね。」

「お前らも大変だな…。」

「もうね、皆がボケすぎて、優が疲れてたよ。」 「優には同情する。」

「いや、お前らもボケてんだろ。てか愛は？ツッコミ。」

「愛はダメだ。途中までツッコんでいたが、最終的に桃と喧嘩をしていた。」

「…相変わらずだな…。」 「ほんとだよ。」

「じゃ、私達はそろそろ行く。」 「じゃあね〜明！」

「おお、じゃあな、頑張れよ。」

「生徒会〜 生徒会〜 たっのっしいな〜」 「杏、何を歌っている。」

ワイワイ ワイワイ

「…生徒会も大変だな。」

…あ、梨華の家。

ピンポン 『はい』 「あ、梨華、私。」 『キターーーー』

『……………!』

「うるせっ!」 「…ん？薫の音が聞こえた。もう来てんのか。」

ドタバタドタバタ ……うつせーな。

『明嬢を迎えるのは私よ!』 『薫さんは下がっててよ! 私がドア開けるから!』

ドタドタ バタバタ

『ちよつと、押さないでよ梨華さん!』 『薫さんがどけばいいでしょ!』

『邪魔だつて言ってるでしょ! ……ギャツ!』 『ちよつ薫さ…わっ!』

ドンツ ガタツ!

え、スゲー音したぞ。ちよ、開けよ。

ガチャツ 「あ、明(嬢)…イテテテテツ」

「梨華さんが押すからこけたのよ!」 「薫さんが避けたから滑つたんだよ!」

「……………何してんだお前ら。」

梨華…青いロンTにチェックのスカートと黒タイツ。

「やっぱ梨華は女らしいな」「ほんとに!?!?ありがとうおおおおお
おおおおお」

「「ありがとうおおおおおおおおおおおおおおおおお」

「いや、二人とも喜びすぎだろ」

「「ありがとうおおおおおおおおおおお」

「だから喜びすぎだって」

「「うっせーバーカ!?!?!?!?!」

「あれ?お前らネタあわせでもしたのか?」

「「大好き!?!?!?!?!」

「え、何で?」

第四十ラウンド「昔話」(前書き)

本当に久しぶりの更新になりました。
色々と忙しくて(汗)

今回は、久しぶりの更新って事で、
明と梨華の過去に触れてみます。

皆さん、お忘れかもしれませんが、
梨華の過去編に出てきた、彩が出てきます。

第四十ラウンド」昔話「

30分程して、やっと梨華と薫が落ち着いた。

「ねえ、これから何する？」梨華がポカンとした顔で聞く。

「お嫁さんごっことかどうかしら？」薫が言う。

「いや、やんねーよ」

ほんっとバカだな。

「うーん…あ、そっだ！梨華さんと明嬢って、幼なじみなんでしょ？」

「うん、そっだよ」「今さら？そっだけど」

『昔話とか、聞かせてよ』

昔話…？

「えっとね…私達が仲良くなったのは、幼稚園の頃で…」梨華が話し出す。

幼稚園時代

『ねえ、遊ぼ？』

『えー！やだ！』

『何で？梨華と遊ぼうよー！』

『だって、梨華ちゃんバカだもん！！』

バカだもん！！ バカだもん！ バカだもん… バカだもん…
バカ…？

『バ、バカ…』ガビーン

『プツ…ははははははは！』

『え…？明ちゃん…？』

『お前面白いなー！大丈夫大丈夫、アイツらのが、よっぽどバカだから…！はは！』

「で、それから明と仲良くなったんだよね〜」

「アハハハハハハ！！梨華さんも明嬢も…変わらないわね〜！」

「え、私、梨華にそんな事言っただけ？」 「言っただよ〜」

「でね、小学校の時は…」

小学校時代

4年生ぐらいのとき、クラスの男子が言っただ

『梨華ってバカだよな』 『え？私バカじゃないよ』

『いや、バカだろ』 『バカじゃないってば！』 『ギロツ』

『梨華こえー！明の鬼みてーな性格、移ったんじゃねーの？』

『誰が鬼だ！！』 『うわ！出た男女！』

「ブハツW男女！明嬢、男女って言われてるじゃない！！」

「そっぴや、そんなことあったな…」

「でね…中学ではね…」

中学時代

「……………中学ではね、あのね…」

「ん？どうしたの梨華さん？」 「梨華…？」

「彩っていうね…友達が居てね…」 「！梨華っ！」

『お前のその性格、うっとうしいんだよ！』

『明に気に入られて、調子乗ってんじゃねーよ！バカのくせに！』

『お前の事友達だなんて思ったこと無いから』

「ちょっと、トラブっちゃったんだよね…ははっ」

「そう…なの」「……………」

「…もう、やだなー！そんな暗くなる話じゃないってば！ほら、飲も飲も！」

「いや、何を飲むんだよ」「そうでしたー」へへッ

「まったく、梨華さんはバカなんだから…」

「あれ、気のせいかなー？私、昔からずっとバカしか言われてない気がするよ！」

「いや、気のせいじゃないと思うわ」「えっ!?!?」

「バカだもんな」「明まで!?!?」

「しょうがないわよ、バカなんだから」「薫さん!?!?」

第四十一「ラウンド」鯛（前書き）

どうもお久しぶりです

第四十一「ラウンド」鍋

「はあ、喋りつかれたわね」ハア…ハア…

「うん、もう喋れないよ…」ハア…ハア…

「いや、何でそんなに疲れてんだよ」

「てか、今何時だ…？」

時計が指していたのは、夜の6時。

「はっ！？マジかよ」

「どっだけ喋ってんだ私らっ！」

「そりゃ疲れるわ！てか疲れてない私のがおかしいじゃねーかっ！」

「ん…？明嬢？どうしたの？」

「いや…時計…。」

「うわあああああああああああああ…！…！」

梨華が悲鳴に似た叫び声を上げた。

「うるせっ！梨華…？どうした!？」

「もう6時だアアアアアアアアアアアアアア！！」

「いや、うるせーな！驚くのは分かるけどそこまでじゃねーだろ」

「うん、ごめんね黒木」

「分かればい…黒木？今黒木だった？」

「全く、梨華さんはこれだから困るわね…」

「時計がどうしたっていうの?？」

薫があきれたように言う。

「や、だから6時だっつってんじゃん」

明の言葉を無視して、薫が振り返る。

「ぎゃあああああああああああああああ…!!!!!!」

「6時よおおおおおおおお!!!!!!」

「だから6時だっつったじゃん！馬鹿だろ、お前馬鹿だろ」

「この世の終わりよおおおおおおお！……！！」

「何でだようるせーよ黙れよ」

「皆死ぬわああああああ！……！！きゃあああああああああ
ああ！！」

「何で6時に皆殺されるんだよ、6時にそんなパワーねーよ馬鹿」

「逃げろおおおおおお！！……！！」

「お前ら馬鹿通り越して頭おかしいだろ！！」

「ごめんね黒木」

「うん、だから何で黒木？おかしいよな？」

しばらくして

「よし、じゃあ明。すき焼き食べよ？」

「展開はえーな、まあいいや、腹減ったし。」

ピンポン

「ん？誰か来たぞ？」

「明嬢…私ね、実はかくや姫なの…今夜、月に帰るのよ、迎えが来たわ…」

「うん、そのまま帰れさようなら。」

「だーれーかなあ？だーれかなあ」

ガチャッ

「あ、いらっしやーい、丁度良かったよ」

「おっすーお邪魔しまーす」

「上がって上がって」

ん…誰だろ…。

「うーす」「どうも」「……………」

「優！」「杏さん！」「美由ちゃん」

「そっかお前らか、今日は三人？」

「いや、もう一人…あれ？あのバカどこ行った？」

「…」

入ってきたのは、ひよこの頭の着ぐるみを被った恵梨みたいな人。

「「「「「「.....「「「「「」

「ピョピョー..ピョピョー..」

「「「「「.....「「「「「」

「ピョピョー..ピョピョー..」

「.....ダーッ!」ゲシッ

優が恵梨らしきヒヨコにとび蹴り。

「ピョーっ!」バタッ

「足がーっ!足が折れたピョーッ!..猪いのししに突進されたピョー!」

「誰が猪やねん!もう一発行くか!?!」

「あの女にはお花畑でも見せて、もっと優しくなってもらうピョーッ

...」

「頭の中がお花畑のお前には言われたくないわっ!」

急にやって来て、急にボケて、急にツッコむ。

「何で私の周りはバカばっかなんだろうな。」

そう言いながら笑って、黒木明は肉に手を伸ばすのであった。

第四十一ラウンド「鍋」(後書き)

これで春休みお泊まり編終了です。
何か中途半端になってすみません。

その後のすき焼きパーティは、皆さんで自由に想像してください。

次回からは恵梨編行きます。

私の敵は変質者、キャラプロフィール（前書き）

今回は恵梨編に行く前に、リクエストがあつたので、キャラのプロフィールを書かせてもらいます！！

一応、明達三人と生徒会のメンバーは入れてます。

他に入れて欲しいメンバー・増やして欲しい質問があれば、リクエストしてください。

なお、明達3人には、『見た目』という欄がありますが、生徒会のキャラにはありませんので。

私の敵は変質者、キャラプロフィール

私の敵は変質者？キャラ生徒手帳。

主人公

名：黒木明（明嬢）

5月14日生まれ A型

身長163cm 体重49kg 2年A組

髪型：黒髪で首の真ん中ぐらいまでのショート（少し外ハネ）
見た目：目はちよつとツリ目、カツコイイ系の美形。

好きな食べもの 鶏肉

嫌いな食べもの 甘い物

好きなタイプ 根性のある奴

苦手なタイプ 自慢ばかりの奴

サブ主人公

名：倉本梨華（梨華さん、天然）

7月13日生まれ O型

身長159cm 体重45kg 2年A組

髪型：黒髪でちよつとウェーブのかかったセミロング
見た目：タレ目で、目がパッチリ二重で、全体的に可愛い。

好きな食べもの 卵焼き
嫌いな食べもの なすび

好きなタイプ 優しくて可愛い人
苦手なタイプ 冗談が通じない人

名：美並薫（薫さん、変態）

9月28日生まれ AB型

身長160cm 体重46kg 2年A組

髪型：茶髪が入ったサイドポニー

見た目：少しタレ目、大人っぽく、黙っていればすごく美人。

好きな食べもの 明と一緒に食べるご飯

嫌いな食べもの 一人で食べるご飯

好きなタイプ 明嬢

苦手なタイプ 梨華さん

生徒会

会長：土紅 恵梨

12月13日生まれ A型

身長161cm 体重：49kg 2年C組

髪型：黒髪に少し茶色が混ざったストレートロング（胸の下ぐらい

までの)

好きな食べもの 寿司

嫌いな食べもの 生クリーム

好きなタイプ 頼れる人

苦手なタイプ 堅苦しい人

副会長：奈花川 優

4月4日生まれ O型

身長157cm 体重45kg 2年C組

髪型：黒髪クセツ毛ショート（外ハネで明よりは少し髪が長い）

好きな食べもの 肉

嫌いな食べもの 納豆

好きなタイプ 自分より強い人

苦手なタイプ 自分より背が低い人

書記：藍沢 杏

8月8日生まれ B型

身長158cm 体重47kg 2年D組

髪型：黒髪セミロングで、カチューシャをつけている（前髪有）

好きな食べもの 野菜
嫌いな食べもの おでん

好きなタイプ 人の悪口を言わない人
苦手なタイプ すぐに怒る人

庶務：河野 愛

3月10日生まれ B型

身長161cm 体重48kg 2年C組

髪型：茶髪ショート、前髪がちょっとパツツン

好きな食べもの チョコレート
嫌いな食べもの チーズ

好きなタイプ 背が高い人
苦手なタイプ すぐ人に甘える人

会計：吉川 桃

9月2日生まれ A型

身長159cm 体重46kg 2年D組

髪型：ナチュラルブラウン（地毛）の肩ぐらいまでのショート、前髪が長くてピンでとめている。

好きな食べもの 野菜

嫌いな食べもの 無し

好きなタイプ 話が合う人

嫌いなタイプ キアラを作ってる人

手伝い・報告係：神谷^{かみや} 美由^{みゆ}

4月13日生まれ AB型

身長160cm 体重48kg 2年D組

髪型：茶髪ロングで前髪は横わけ。

好きな食べもの ラーメン

嫌いな食べもの 塩辛い物

好きなタイプ 人を差別しない者

嫌いなタイプ 馬鹿

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5004p/>

私の敵は変質者？

2011年10月8日08時32分発行